繪畫は、宮殿の扉の表に四天王、仁王、裏に菩薩等を密陀僧で描き、臺座の正面に天人、側面に羅漢、背面に極樂淨土の樣な繪を胡粉と彩色で描いてゐる。其の菩薩の面相は豐滿で、線は流暢にして强く、肉體に朱線を用ひ、衣を透して身體の見えるのも、法隆寺金堂の壁畫と同樣である。今一つ繪畫の遺物として聖德太子像がある。これはもと法隆寺に在つたもので、今は御物となつてゐる。時代は服裝の考證から天武持統の頃のものと考へられるが、劍が體の前に描いてある點などから、摸寫であつて原畫でないと云ふ說もある。阿佐太子筆と傳へられてゐるがわからない。觀音寺の太子二王子像といふのが、此の圖と頗るよく似てゐる。とにかく肖像畫としては最古のものである。

## 六　工藝美術





**橘夫人の厨子**

當代の工藝美術は前代に引續いて佛教に關するものが相當發達し、樣式としては、飛鳥式から唐式を帶びたものとなつた。其の代表的遺物は法隆寺金堂にある橘夫人厨子である。此の厨子については、建築及び彫刻の項にも述べたが、厨子全體としては工藝美術品であり、內容佛の光背、光屏、臺盤が金工として驚くべき傑作である。光背は簡單なものであるが、其の透彫の唐草の曲線は非常に流暢である。光屏には蓮の花や葉や莖を巧に模樣化して現はし、其の間に菩薩を配し、其の意匠、構圖頗る優れ、手法も優秀である。而して臺盤には波を現はし、波の中から三つの蓮莖を出し、それに三尊を載せ、光屏と聯絡した意匠の自由にして卓越せる事は驚嘆すべきものがある。

**其の他の遺物**

猶金工として注意すべきものに藥師寺金堂藥師像の臺座と同寺東塔の水煙とがある。臺座は四方に怪奇の人物を浮彫とし、其の周

圍には葡萄唐草を附し、下部の四方には四神即ち玄武、朱雀、蒼龍、白虎を現はしてゐる。それらの意匠が奇拔で、佛像の臺座としては頗る珍らしい。東塔の水煙は、天人を巧に模樣化したもので、意匠卓拔にして手法も優れ、水煙としては珍らしい傑作である。次に木工としては、建築參考品として述べた海龍王寺西金堂及び極樂院の五重小塔がある、何れも細部などは木工の技巧を見る事が出來る。染織物としては、勸修寺の繡が釋迦說法の圖を現はし、佛像の姿勢、面相等、法隆寺金堂の壁畫に類似し、繪畫の參考品ともなるものである。最後に奈良の正倉院の御物は、多く聖武天皇時代即ち天平時代のものであるが、中には當代のものがある。法隆寺の寶物及び同寺から獻納した御物の中にも當代の工藝品が多少ある。

## 七　白鳳美術の特色と價値





**四種の特色**

我が國の美術は、前時代に至つて佛教の傳來すると共に、初めて燦然たる光輝を發したが、それは朝鮮を經て、支那南北朝の美術を輸入したので、其の末葉に至つて隋唐との直接交通を開始したが、其の影響は未だ十分に現はれず、當代に至つて漸く現はれ、次の天平時代に至つて顯著となるのである。即ち當代は一方に於いて前代の風を繼續すると共に、他方に於いて隋唐の風を加へ、次代に移る過渡期をなすのである。この過渡期といふ事が、當代美術の主な特色の一つである。次に模倣美術である點、第三にそれが佛教美術である點等は、飛鳥美術と同樣である。最後に意匠、手法、表現に於いては前代よりも概して進步し、飛鳥風の繼續のものは猶古拙の點を免れないが、隋唐風のものに至つては手法流暢にして、自由な意匠を回らし、やゝ圓滿な表現を持つてゐる。而して此の最後の特色が次代に至つて發展するのである。

**三種の價値**

當代美術の特色の一つは過渡期であるといふ點に在るのであるが、その過渡期たるや、黄金時代たる天平時代に至る前なので、即ち美術の發達上の價値の大なるものがある。次に模倣美術であるから獨創といふ點からは價値に乏しいやうであるが、建築の如きは前代に於けるが如く日本風に變化した點多く、其の點に多くの價値を持つてゐる。殊に藥師寺の東塔の如きは特殊の三重塔として、古今獨歩の美點を發揮してゐる。又模倣のもとは支那の隋唐であるが、更らに印度、希臘に溯り、所謂健陀羅式を移して立派な作品を遺してゐる。例へば彫刻に於ける藥師寺東院堂の聖觀音、繪畫に於ける法隆寺金堂の壁畫の如き、殊に壁畫は非常な傑作で、宗教畫として世界美術上に誇るに足るものである。又末葉に至つては唐の模倣ではあるが、渾然たる彫刻の傑作を出してゐる。藥師寺金堂の藥師三尊が即ちそれで、我が國の佛教彫刻を通じての傑れたものである。これは手法も流暢で、巧み



な比例をもち、釣合もよく、面相は圓滿で、銅像としては天平時代を通じても第一の傑作である。又橘夫人厨子の彌陀の如きは、其の臺盤と光屏とを聯絡した意匠の巧妙な點が驚く許りであり、法隆寺五重塔内部の塑像の寫生的なものと共に、當代の意匠、手法、表現の進歩を示すに足るものである。之れを要するに、白鳳美術は、模倣時代中の一過渡期をなして居り、主として次の黄金時代を現出する前提として發達上の價値を有するのであるが、其の遺物は、建築の藥師寺東塔、彫刻の同寺金堂藥師三尊、繪畫の法隆寺金堂壁畫の如き、不朽の傑作があるので、他の時代に比して毫も遜色なき價値を有すゝものである。

# 第四章 天平時代

## 一　時代の大勢

**概觀**

天平時代は、聖武天皇の御即位(七二四)から桓武天皇の十三年平安京(京都)に奠都された時(七九四)まで、七十年間である。前の白鳳時代八十年間を奈良時代の前期とするならば、此の七十年間は其の本期である。年月を比べると、前期は十年長いけれども過渡期であつて、本期は奈良佛教の極盛時代で、又佛教美術の黄金時代である。即ち前期は飛鳥時代の南北朝美術から本期の唐美術に移る過渡をなすものであるが、比較的長い過渡期で、其の前後とは異る特色の著しいものがあるので、之れを一時代とし、天平時代と分つたのである。天平時代も聖武天皇の御即位は、未だ平城奠都後僅に十三年で、諸大寺の移建、創建も猶少數に過ぎず、萬事緒についたのみであつた。併し天皇は佛教を信じ玉ふ事最も篤く、自ら東大寺を建

て、佛教の興隆極點に達し、政教一致も完全に行はれた。

**政治と外交**

政教一致の完全に行はれた事は、即ち聖武天皇が篤く佛教を信じ玉ふた事から出たのである。天皇は自ら三寶奴と稱され、諸國に國分寺を建て、總國分寺として東大寺を創建され、本尊として大佛を造立され、光明皇后を始め、行基、良辨兩僧正其の下に在つて之れを助け、曠古の大事業を成就された。而して之等の佛教に關する事業を行ふのが、即ち國家を治める事であつたのは、東大寺を金光明四天王護國之寺と稱された事でもわかる。又光明皇后が藤原氏の出だつたので、藤原氏の權力は中々盛んで、其の創建した興福寺も東大寺と並び稱された。併し聖武天皇は、國努を傾けて東大寺を建てられたので、其の後は財政疲弊し、次いで惠美押勝の擅權、弓削道鏡の擅權相つぎ、光仁天皇の御世となつて漸く朝政を刷新され、政教一致を癈し、蝦夷の征服なども行はれ、次の桓武天皇となつて平安京に奠都





され、天平時代は終つた。當代の外交は、前代に引つゞいて遣唐使を送り、唐との交通が盛んであつたが、聖武天皇御即位の年が唐は玄宗皇帝の開元十二年に當り、文化爛熟し、玄宗は楊貴妃の艶色に溺れ、安祿山の反亂などあり、漸く最盛時を過ぎて行つた。即ち天平時代の初頭が唐の文化の最高潮に達した時で、我が國へ最も強い影響を與へ、其の後は漸次衰へたのである。

**華嚴律二宗の傳來**

佛教は、飛鳥時代に三論、成實の二宗、白鳳時代に法相、倶舍の二宗が傳へられたが、當代に入つて華嚴、律の二宗が傳來し、所謂南都六宗が揃つた。「華嚴經」の傳來したのは、元正天皇の養老年間であるが、これを講說したのは聖武天皇以後である。我が國で華嚴宗の第一祖とするのは、新羅の審祥大德であつて、審祥は來朝して大安寺に住し、華嚴の深理に通達し、我が良辨僧正は天平十二年靈夢を感じて審祥を金鐘道場に招き、始めて講莚を開いた。よつて良辨を第二祖とする。之より先天平五年良辨に羅

索院を賜ひ、改めて金鐘寺と云ひ（今の法華堂）、同十二年審祥を招いてから、この寺を以て華嚴弘通の道場とした。猶良辨は東大寺が出來るに及んで始めて同寺別當に任ぜられた。華嚴宗は他の五宗が印度宗であるのに反し支那宗で、賢首菩薩が大成したものである。實大乘教で、教義最も深遠、他の奈良佛教を睨視した。律宗は釋迦の教が經、律、論の三藏ある中律藏によつたもので、それが釋迦滅後印度で異論を生じ、終に分れて五部となり、曇無德部の「四分律」は其の一部で、更らにそれが分れて三派を生じ、唐の道宣の教系を南山宗と云ひ、我が律宗の系統である。即ち天武天皇の時、道光律師が入唐して、之れを傳へたのを第一傳とし、道璿律師の來朝を第二傳とし、天平勝寶五年鑑眞和上の渡來を第三傳とする。鑑眞和上は、來朝せんと志してから到着するまで實に十一年を費し、天平勝寶五年十二月薩摩の阿多に着し、翌六年四月大佛の前に戒壇を築き、天皇以下受戒され、後大佛殿の西に戒壇





院を作り、下野藥師寺及筑紫觀世音寺にも戒壇を築き、之れを三戒壇と稱した。更らに天平寶字三年唐招提寺を創め、戒壇を築いた。

**佛教の隆盛**

斯くの如くにして新たに二宗を加へ、佛教は益々隆盛を極め、政教一致を實現した。之れを具體的に示すものは、東大寺及び國分寺の建立である。國分寺の由來は、天武天皇が諸國に「仁王經」「金光明經」等を講讀せしめられたのから起るのであるが、聖武天皇は「最勝王經」を講讀せしめられ、別に「法華經」を諸國に備へしめ、丈六釋迦及び脇侍菩薩像を造らしめられ、天平十三年三月に至つて國分二寺創設の勅を發し、重ねて丈六の佛像を作る事、及び七重塔建立を命じ、「最勝王經」及び「法華經」各十部を寫し備へしめ、且つ天皇自ら「金字最勝王經」を寫し給ふに擬して、塔每に各一部を置かしめられた。而して東大寺を以つて總國分寺とし、天平十五年に毘盧遮那佛造立の勅を發し給ひ、始めは滋賀の甲賀寺に造らんとし、天平十八年

現在の地に造り始め、天平勝寶元年成つた。同四年四月九日、天皇皇后百官を率ゐて開眼供養を行はれ、同六年七月七日大佛の前に戒壇を築き、天皇皇后太子以下登壇受戒する者、四百餘人に及んだと云ふ事である。

**本地垂跡說**

佛教に聯關して一つの注意すべき事柄は、本地垂跡說の著しくなつた事である。本地垂跡說の起源は、既に白鳳時代の末、元明天皇の時にある。即ち土佐に八幡菩薩が出現したのが、元明天皇の時であつて、これを本地垂跡說の嚆矢と見るべく、大佛鑄造に至つて著しく顯はれて來た。而して盛に之れを說いたのは、義淵僧正の後に出た玄昉僧正であつたらしい。本地垂跡說と云ふのは天津神は獨り我が秋津洲ばかりでなく、世界を護り給ひ、大佛を天照皇大神の本體とするのである。即ち神佛融合の說であるが、それは次の弘仁時代に至つて愈々發展する。





**文學**

當代の文學は、他の事柄と同じく唐の影響を多く受けた。即ち玄宗時代の學風を移植し、中にも阿部仲麻呂と吉備眞備は二大文學者として知られた。仲麻呂は玄宗に愛せられ、秘書監に任ぜられ、彼國の大詩人たる王維、李白などに敬愛せられ、つひに彼地に歿し、眞備は天平七年に歸朝し、朝に立ち、藤原氏の權力旺盛の時に大臣まで昇任した。次に國文學の方面では、白鳳時代に引續いて大歌人が輩出した。其の第一に來るのは山部赤人で、聖武天皇の前半世に盛に活動したが、其の歌は內容外形とも人麿と相反し、人麿は長歌に長じてゐたが、赤人は短歌に秀で、人麿は詞藻の絢爛、格調の威嚴を以つて優れたが、赤人は深く山川草木を愛し自然と同化し、坦々たる辭句の中に自ら特色を存し、人麿と比肩すべき大歌人であつた。次に山上憶良は赤人と時代を同じうし、入唐して後東宮の侍讀となり、漢文學に精通し、支那思想の感化を受くる事『萬葉集』中の隨一である。長所は長

歌に在つて、人倫の道を敎へ、人生の無常を說き、內容は餘程複雜となつた。次に大伴家持は、聖武、孝謙兩天皇時代の人で、光仁、桓武の兩朝に仕へ、政治上にも活動した。家持は始めは主として戀愛を歌ひ、人麿、赤人とは全然行き方を異にし、軟派歌人であつたが、後には轉じて、國民的特性を歌ひ詩味橫溢し、人麿赤人と比肩されるに至つた。猶此の外、大伴旅人を始めとし、數多の歌人があり、又『萬葉集』には、地方の歌も多くあるので、當時和歌の流行した事がわかる。漢詩は當代に『懷風藻』が選せられ、作る事は可なり行はれたらしいが、支那の詩に比べては非常に劣り、和歌と比べても論ずるに足らぬ。

**音樂**

音樂については、天平三年、雅樂寮雜樂生員を定め、大唐樂三十九人、百濟樂二十六人、高麗樂八人、新羅樂四人、度羅樂六十二人、諸縣舞八人、筑紫舞二十人とせられたことが史にあるから、其の盛であ





つた事が察せられる。又天平六年二月には、天皇が朱雀門に幸して歌垣を御覽になつたが、それには男女二百四十餘人が出で、難波曲、倭部曲、淺茅曲、廣瀨曲、八裳刺曲などの音樂を奏して都中の男女に縱覽せしめたといふ事で、非常に盛大なものであつたらしい。

## 二　建　築

**概觀**

天平時代は前の白鳳時代を過渡期として佛敎美術に於ける一つの黃金時代を現出したが、建築も其の中の一つとして發達の最高潮を示した。それは無論佛敎建築を中心としたものであるが、佛敎建築以外について先づ述べると、宮殿建築は前代の平城奠都のあとで、次の平安奠都迄は、寧ろ沈靜の時代であるが、當代も聖武天皇の恭仁及び紫香樂奠都があつたので、多少の進步はあつたであらう。併し兩京とも暫くの間で、又奈良に

復された。神社建築は、當代末葉の神護景雲二年(七六八)春日神社が創設され、春日造の起源を作つた。春日造は住吉造に向拜をつけた形式で、既に多少佛教建築の影響が見える。殊に神社を丹塗にしたのは春日神社が嚆矢で、明かに佛教建築の影響である。これはかの本地垂跡說の勃興と聯關して考へられ、建築上の神佛融合が行はれた譯である。別に神明造に向拜をつけたやうな流造も亦當代末葉から始まつたやうであるが、春日造と共に次代となつて盛に行はれたのであるから、次章に詳說する。住宅建築は、聖武天皇御即位の年から庶民まで瓦屋を許されのたを見ても進步したのがわかる。又貴族は盛に宏壯な邸宅を造營したらしいが、其等の遺物は一つもない。次に當代建築の中心となつた佛教建築については節を改めて述べやう。

**東大寺創建と規模**

東大寺に現存の建築で、天平時代に建築されたものは、法華堂、轉害門、正倉院等三四の附屬的建物に過ぎないが、寺としては當





代を代表するものであるから先づこれから述べる。聖武天皇は、既に述べた如く、天平十三年國分二寺創設の勅を發せられ、更らに總國分寺として東大寺を創建し、其の本尊として大なる毘盧遮那佛を造立せらるゝ大願を發せられた。それは天平十五年、紫香樂宮に行幸せられ、同十月詔して大佛鑄造を發願せられ、翌十六年十一月始めて甲賀寺に大佛の骨柱を建て、帝親しく其の繩を引き玉ふたが、後これを中止し、十八年改めて奈良に鑄造を始め、天平勝寶元年鑄造を終り、同四年四月九日開眼供養を行はれた。大佛についての詳說は彫刻の章に讓り大佛殿は大佛鑄造に着手した翌年、即ち天平十九年起工し、四年を費して天平勝寶三年大體の構造を終り、猶內外の裝飾に十數年を費した。又中門四面步廊は天平勝寶九年に竣工し、大講堂、東西塔、食堂、戒壇院、僧坊其他大小の建築相次いで建てられた。當時の東大寺の境域は、殆んど一里四方に亘り、其の中には春日山、若草山も入つてゐる。諸堂

の配置は先づ南大門(現在の位置)があり、之れを入ると、左右に東西塔がある。此塔は何れも七重で、各々歩廊を廻らし、東塔院、西塔院と稱した。南大門を入つて正面に中門があり、中門から歩廊が起り、左右に伸び、後に廻つてゐる。金堂即ち大佛殿は、其の歩廊の中央に在つて、其の左右から又歩廊が出で左右の歩廊に接してゐる。即ち曰の形をなし、藥師寺の配置に似てゐる。この中門や大佛殿、歩廊等の位置は現在の通りである。猶大佛殿の後方一亙歩廊を出てから大講堂があり、其の北、東、西に三面僧房がある。更らに東に大鐘樓、法華堂があり、東北に食堂、西に正倉院、戒壇院があり、西の境には、北に佐保路門(轉害門)、南に西大門があり、其の間に中御門があつた。大佛殿は、創建當時は、十一間七面、重層、四注の建物で、東西二百九十尺、南北百七十尺、殿内の面積約一千三百十五坪、天井の高さ最高百二十尺、石壇は東西三百二十七尺、南北二百六尺であつた。此の大佛殿も建立





後百年にして治承四年平重衡が南都を攻めた時燒け、鎌倉時代に再建したが、又も永祿十年松永久秀の亂に燒け、元祿年間に再建したものが現在の建築で、九間七面に縮少され、廣さも約八百七十一坪になつてゐる。又東西塔は高さ二百三十餘尺、現存の塔中、最も高い東寺の五重塔の百八十尺に比して猶五十尺高かつたが、燒失後再建もされない。大講堂、三面僧房、食堂等も再建されず、南大門と鐘樓とは鎌倉時代の再建である。

**西大寺の規模裝飾**

東大寺と並んで、天平時代の佛教建築を代表すべきものは西大寺であつた。この方は當時の建築遺物は何もない。天平神護元年(七六五)稱德天皇が、右京一條三坊四坊に創立せられた、即ち天平末期の大伽藍である。其の建築の模樣は、同寺の流記資財帳に詳記されてゐる。それによれば、食堂院、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、馬屋房、政所院、正倉院等があり、一院毎に種々の建築が附屬してゐた。就中最

も宏壯なのは金堂院であつて、藥師金堂と彌勒金堂とから成り、前者は單層、後者は重層の建築で、これに附屬して歩廊、中門、東西塔があつた。藥師金堂は「長十五丈九尺、廣五丈三尺、蓋上東西金銅沓形各重立、金銅鳳形各咋銅鐸、蓋上中間金銅火炎一基、在金銅茄形、令持於獅子形二頭、踏金銅雲形、又宇周廻火炎三十六枚、並在銅瓦形、角隅瓦端銅華形八枚、桶端金銅華形三十六枚、各着鈴鐸等、又四角各懸鐸云々」とあるので、其の裝飾の立派であつた事がわかる。又佛像についても立派の裝飾のあつた事が記錄に殘つてゐる。併しかゝる壯麗な建築や彫刻も、承和、貞觀二度の火災に罹り、鎌倉時代に叡尊によつて再興されたが、固より規模小さく、後又燒けて今日は德川時代の建築と、東塔の礎石と四天王の鬼形が三體殘つて居る許りである。

**創建再建の佛寺**

東大寺と西大寺とは、天平時代に創建された代表的伽藍であるが、其の外にも創建、再建の寺院は頗る多い。併し多くは亡びて、今





日まで殘つてゐるものは、十分の一にも足らない。しかも最も壯麗な代表的のものが殘つて居ないのは殘念千萬である。今遺物を主として、當代に創建又は再建されたものを擧げると左の如くである。

| | | |
|---|---|---|
| 聖武神龜元年 | (七二四) | 大安寺 |
| 同　同　二年 | (七二五) | 興福寺東金堂 |
| 同　同　四年 | (七二七) | 長谷寺 |
| 同　天平二年 | (七三〇) | 興福寺五重塔 |
| 同　同　年 | (七三〇) | 海龍王寺　西金堂現存 |
| 同　同　五年 | (七三三) | 金鐘寺（法華堂）現存 |
| 同　同　六年 | (七三四) | 興福寺西金堂 |
| 同　同十一年 | (七三九) | 法隆寺東院　夢殿、傳法堂現存 |
| 同　同十九年 | (七四七) | 東大寺起工　轉害門現存 |

同　年　（七四七）　新藥師寺　本堂現存

同　年　唐招提寺　金堂講堂現存

淳仁天平寶字三年（七五一）　西大寺

稱德天平神護元年（七六五）

光仁寶龜十一年　（七八〇）　秋篠寺

猶此の外にも、年代の明瞭でないもので、多少の遺物があるので、天平時代の建築はほゞ想像する事が出來る。以下主なものについて述べやう。

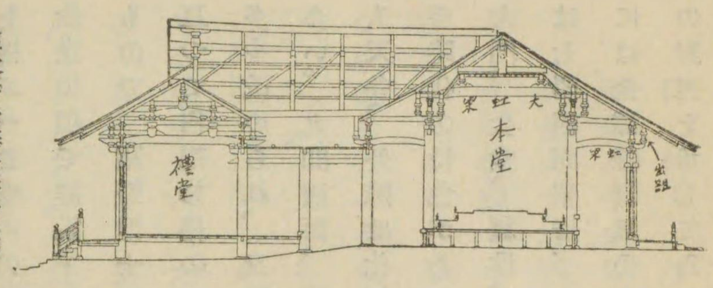
**初期の遺物**

先づ年代は明瞭でないが、初期或は白鳳時代に屬すべき二三の建築がある。其の一は法隆寺東院の傳法堂である。それはもと橘夫人の邸宅であつたのを、夫人が亡くなつてから寺へ寄附したといふ記錄がある。さうすると恐らく和銅、養老頃新都に建てられたもので、それを移建したのであるから白鳳時代のものと考へられる。七間四面、單層、切妻造、組物は大斗肘木、內部は化粧屋根裏で、床を板張としてゐる。當時の住宅建築





を偲ぶべき唯一の材料として貴重なものである。唐招提寺については、後に金堂の項で詳說するが、其の講堂は『扶桑略記』によれば、朝集殿を施入したもので、關野博士に從へば、和銅年間に建てられ、天平寶字四年から六年に亘つて內裡修繕の際、唐招提寺に施入されたものである。この移建の際にも多少改められ、又鎌倉時代にも大修繕を加へられ、外部には鎌倉風の手法が多い。九間四面、單層、入母屋造の建築で、組物は三斗、內部內陣は折上組入天井、外陣は化粧屋根裏となつてゐる。この內部の構造と組物の一部に天平時代の特色がある。次に法隆寺西院に天平初期の遺物が三四ある。卽ち東大門、食堂、經樓、綱封藏等である。東大門は八脚門で小規模のもの、食堂は七間四面單層、切妻造の簡單な建築で、鎌倉時代に大修繕を加へ、柱などには全然鎌倉風のものがあり、天平風の柱と同一建築物の內にあつて、奇拔の對照を示してゐる。經樓は三間二面、重層、切妻造で三斗組の手法雄健な



東大寺法華堂斷面圖

建築、綱封藏は後世の修理が多い。次に海龍王寺は奈良市の西方一里、もと藤原不比等の邸宅の趾を寺としたものと傳へられ、比較的小規模である。其の西金堂は天平二年の建立と傳へ、實物の上から確からしい。三間二面、單層、切妻造の小建築で、修繕のあとが多いが、化粧屋根裏の構造は、天平時代の特色を供へ、見るべきものがある。

**東大寺法華堂**

東大寺法華堂は、もと金鐘寺と稱し、天平五年聖武天皇が良辨僧正の爲めに建てられ、本尊が不空羂索觀音なので羂索院とも云はれた。天平十三年諸國に國分寺を置く事となつた時、金鐘寺を以つて、大和の國分寺とされたが、同十九年總國分寺として東大





寺を創建され、其の境内に入つたので一院となり、法華堂と稱せらるゝに至つた。三月堂と呼ばれるのは、三月に祭が行はれるからである。此の建築は始め五間四面、單層、四注の構造であつたが、鎌倉時代となつて、其の前に五間二面、單層、入母屋造の禮堂を附加したので、屋根は四注と入母屋造とを聯結した、一種特別な形となつてゐるが、變化があつて面白い。今本堂について述べると、壇上に立ち、柱には多少のエンタシスがあり、組物は出組軒は二軒、屋根は本瓦葺である。大小の虹梁とも反りを有し、大虹梁の上には板蟇股を附けてゐる。全體の木割が雄大で力ある表現を持つてゐる。内部は土間で、中央に大きな八角二重の佛壇を置き、天井は内陣折上組入天井、外陣化粧屋根裏となつてゐる。裝飾は内外とも丹土を塗つたのみである。此の建築は、禮堂を附加した爲めに、當初の外觀は、背面から見るを得るのみであるが、禮堂と聯結された側面が中々美しく、本瓦葺の美が最もよく發揮

され、東大寺境内では、最も優れた建築である。又禮堂が鎌倉時代の特色を持つてゐるので、兩者を比較對照してみると興味が深い。

**轉害門と正倉院**

東大寺は既に述べた如く天平十九年に創建されたが、當時の建築で現存するのは轉害門が殆んど唯一のものである。この門はもと佐保路門と稱され、八脚門で、切妻屋根の恰好極めてよく、雄大な門である。殊に側面の妻から見た所は非常にいゝ比例を持ち、虹梁、蟇股、懸魚の配置など頗る巧に出來てゐる。この板蟇股(股を開いた本蟇股に對して云ふ)は天平時代獨特のもので形が美しい。猶此の門は鎌倉時代に修繕せられ、手法も鎌倉風に改められた點が少くなく、初めは鎌倉再建と誤られた位である。正倉院は東大寺の寺寶を納める爲めに建てられ、聖武天皇崩御後、御物で東大寺に寄附されたものが數千點納められた。建築年代は詳でないが、大佛落成の年、即ち天平勝寶三年から間もなくで、同八年聖武天皇崩御の年には既に





出來てゐた事が明かである。始め雙倉(ふたつぐら)と呼ばれ、後中央の倉を建て三倉と稱されたと云ふが、當初から三倉あつて增築でないと云ふ說があり、實際の建築からも增築でない樣に思はれる。正面十八間八寸餘、奥行五間一尺二寸、高さ五間、床下九尺、寄棟造、本瓦葺の建築で、三つに區分せられ、左右は三角形の大材を横に積重ねた校倉式となつてゐる。大體の恰好よく、床下を九尺もとつた點は、藏品を保存する上からも、雄大の氣分を作る上からも大に役立つてゐる。倉庫であるが、立派な美術的建築である。猶東大寺には、法華堂前及び勸學院前に校倉がある。何れも天平勝寶頃の建築である。

**法隆寺夢殿**

法隆寺東院は、もと聖德太子の斑鳩宮(いかるがのみや)のあつた所で、斑鳩宮は推古天皇の九年に建てられたのであるが、入鹿の亂に燒失したので、天平十一年行信僧都が伽藍を建てたのである。其の配置は南に南大門があり、之れを入ると禮堂があり、禮堂の左右から步廊が起つて後方の舍利殿、繪殿

の左右に終つてゐる。夢殿は金堂に當る堂で、禮堂の奥、歩廊の中央に位置し、舍利殿繪殿の後方に傳法堂があり、其の左に鐘樓がある。即ち其の配置は整然たるものである。其の中禮堂、舍利殿、繪殿は鎌倉時代、南大門は足利時代の建築である。夢殿は所謂八角圓堂であるが、それは聖德太子が斑鳩宮で三味で入らるゝ八角圓堂の跡なので、それに倣つたのである。八角二重の壇上に立ち、二重目には勾欄を廻らしてゐる。建築の平面も八角で、屋根も八方に葺き下ろし、中央頂上に寶珠、露盤を載せてゐる。柱も八角で、多少エンタシスがあり、組物は出組、軒は二軒、木割雄大である。内部に八本の柱を立て、中央に佛壇があり、本尊は救世觀音（飛鳥時代）、其の前に觀音（弘仁時代）があり、行信僧都の像もある。此の建築は八角圓堂として最古のもので、恰好も頗る美しい。尤も鎌倉時代に大修繕を加へ、外部の組物などは鎌倉風に改められてゐる。





**新藥師寺本堂**

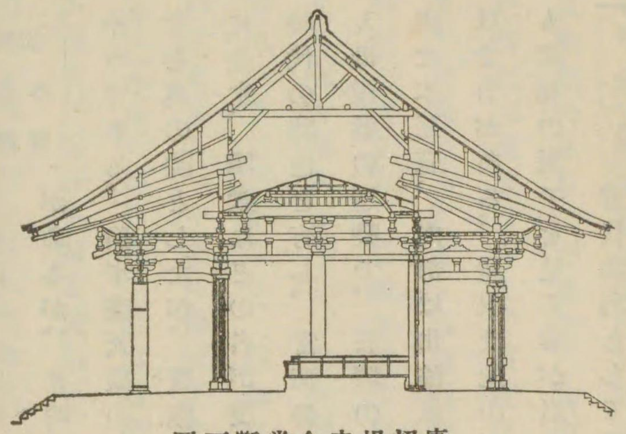
新藥師寺は奈良市中にある。其の創立については種々異つた記錄があるが、光明皇后が天平十九年に建立されたといふのが正しいやうである。猶孝謙天皇の時、更らに七堂伽籃を建て、前の佛殿即ち今の本堂を奥の院としたが、寶龜十一年正月雷火の爲めに堂塔が燒け、今も寺の前に金堂、講堂などの名が殘つてゐる。現在の本堂は樣式、手法の上から天平時代の特色を有し、當初の儘殘つてゐるものと考へられる。七間五面、單層、入母屋造の建築で、石壇の上に立つてゐる。組物は大斗肘木、軒は二軒、屋根は本瓦葺、内部は化粧屋根裏で、其の構造頗る大膽で、木割雄大、手法簡單で力がある。屋根は此の時代の他の建築のやうに改造してないので、勾配も當初の調子を見る事が出來る。内部の圓形佛壇も珍らしく、本尊藥師の外

**唐招提寺金堂**

當代彫刻として傑出した十二神將がある。

唐招提寺は、天平寶字三年鑑眞和上によつて、右京五條二坊に創

建せられ、金堂は和上と共に來朝した如寶が衆と共に建て、次いで經樓、鐘樓を建て、講堂は平城京の朝集殿を賜り、食堂は藤原仲麿が邸宅を寄進し、羂索堂は藤原清河が施入した。其の配置は先づ南大門があり、之れを入ると左右に東西塔がある。南大門の眞直に中門があり、其の左右から步廊が起り、左右に延び、後ろに折れて金堂の左右に終つてゐる。金堂の後ろには講堂、食堂と中央に建ち、左右に經樓、鐘樓がある。即ち南大門、中門、金堂、講堂、食堂等は一直線上に立ち、嚴正な對稱の配置をもつてゐる。而して之等諸堂の內、金堂と講堂とを主とし、



唐招提寺金堂斷面圖





經藏と寶藏とが殘つてゐる。猶皷樓と三面僧房の中の東室とが鎌倉時代の建築である。さてこれから金堂の建築について說明するが、それは高い壇上に立ち、七間四面、單層、四注の建築である。七間四面の大いさは、此時代の金堂としては最も大きい方ではないが、小さい方でもない。前列の柱一側に壁をつけず開け放しとしたのは、陰影をつけ、建物を奧ぶかく、又雄大に見せ列柱の美を發揮せしめる。これは天平時代によくやつた事で、建築美を高める巧妙なやり方である。四注の屋根は、此の時代に最もよい建築に用ひたので、大佛殿なども同樣である。飛鳥時代には入母屋造を第一としたのであるが、變化してゐる。而して大屋根の兩端には鴟尾(しび)をあげる、鴟尾で天平時代のものゝ殘つてゐるのは、此の金堂の西のもの丈けである。屋根は關野博士の說によれば、元錄年間修繕の際、改めて勾配を急にしたといふ事であるが、猶其の恰好は頗るよく、建物全體の高さと巾との比例などもよい。細部

について云ふと、柱には多少のエンタシスがあり、組物は三手先の完成した形を示し、板蟇股を附し、軒は二軒、地垂木は丸で飛擔垂木は角である。内部は内陣は折上組入天井、外陣は組入天井で、天井の格間、支輪間、虹梁、柱等には彩色で寶相花を描いてあるが、今は大分剝落してゐる。中央に佛壇を置き、其の後壁には三千佛を描いてあつたが、之れは全部剝落して了つた。此の金堂は大體の恰好よく、壯大森嚴の表現を有し、殊に前面一面を開け放しとしたので大に美點を增し、内部の感じもよく、木割巧妙にして手法洗練し、裝飾も立派である。天平時代の佛殿として、第一流のものではないが、現存のものでは第一の傑作で、飛鳥時代の法隆寺金堂、藤原時代の平等院鳳凰堂などと共に日本建築を代表するものである。

**榮山寺八角堂**

榮山寺は大和五條の北數町、吉野川の河畔に在る。其の八角圓堂は、藤原武智麻呂の子仲麻呂が、先考先妣の爲めに建てたと云ふ





記錄があるので、武智麻呂の歿した天平九年を遠からぬものである事がわかり、樣式手法の上からも其の時代のものである。鎌倉時代に修繕し、近年又大修繕が行はれた。堂は八角の石壇上に建てられ、八角の平面を有し、屋根も八方に葺下ろされてゐる。組物は三斗で簡單であるが、木割雄大で、内部化粧屋根裏の構造大膽である。外部の柱は八角で八本あるが、内陣柱は四本である。これは法隆寺夢殿、同寺西圓堂、興福寺北圓堂、同寺南圓堂等皆内陣柱が八本であるのと異り、構造上も違つてゐる。裝飾は柱、柱上の貫などに寶相花、水禽、鹿、雲、天人、佛像などを彩色で描き、剝落はしてゐるが殘つてゐる。又天井の代りとなる程の大天蓋をかけ、其の格天井にも寶相花を彩色で描いてある。此の建築は、法隆寺夢殿と共に天平時代の二つの八角圓堂で、彩色裝飾の殘つてゐる貴重の遺物である。又天蓋の裏板及び貫に人物や鳥の戲畫があるのは、當代繪畫の參考となる。

## 三　彫刻

**概觀**

天平時代の彫刻は、建築と同じく、佛教彫刻に於いて、發達の最高潮を示した。佛教彫刻は九割九分を占めて居るが。伎樂の流行につれて、伎樂面の製作が盛となり、其の遺物は中々多い。又肖像彫刻も始まつたが、夫はすべて高僧の肖像で、佛教に緣の近いものである。佛教彫刻の種類は益々多くなり、觀音でも所謂七觀音が殆んど作られた。材料の種類も廣くなり、前代まで用ゐられた銅、木、塑の外、乾漆が賞用された。次代以後は木が主として用ゐられたのに比べ、當代が乾漆を主とし、塑が之れに亞いでゐるのは材料上の特色である。而して體格の比例はます〳〵巧となり、面相は豊滿にして、しかも崇高の表現を有するものが多い。手法は概して流暢で、圓熟して來た。此等の點は、天平彫刻が益々自然に近づくと共に理想





をもとりいれた事を示す、換言すれば寫實と理想とを巧に調和させてゐるのである。

**天平彫刻の系統**

天平彫刻は、一言で云へば白鳳彫刻の繼續で、其の大成したものである。白鳳彫刻には、飛鳥時代の止利佛師派のものと飛鳥時代の止利佛師以外の派のものと、本流として唐風のものとあつたが、其の本流の唐風のものが、唐との交通の益々頻繁になるにつれ、一層その影響を受けて發達したのである。前にも述べた通り、唐の彫刻も單に隋の繼續でなくして、印度や西域や健陀羅の影響が大いので、それらの分子が唐を經て我が天平彫刻に加はつてゐる事は當然である。併し我が天平彫刻も全然唐彫刻の模倣には終つてゐない。遺物によつて之れを比較すれば、唐代のものは、既に述べた通り、洛陽龍門、西安府寶慶寺、濟南府神道寺千佛崖等にあるが、これらを我が東大寺法華堂内の諸佛と比べて、其の全體の比例に於いて、面相

の表現に於いて、將又手法に於いて天平時代のものは數段の上に在る。卽ち唐の模倣ではあるが、所謂藍よりいでゝ藍より靑いものである。蓋し、飛鳥時代、白鳳時代を經て、技術漸く進歩し、これに西域、健陀羅の影響を受けた唐の樣式をとりいれ、更らに大彫刻家があつて、斯かる傑作を生んだに違ひない。殊に唐のものが石を材料としてゐるのに反して、我が天平彫刻は主として乾漆と塑とを材料としてゐる點で、所謂材料から來る手法と表現とが大に彫刻の美を高めるに役立つてゐるので、決して單なる唐の模倣でない事がわかる。

**東大寺の大佛**

主なる遺物を述ぶるに先立つて述べて置かねばならないのは、東大寺の本尊たる大佛、卽ち毘盧舍那佛である。これは天平時代の遺物としては、胸以下蓮座があるに過ぎないが、天平時代の佛敎及び藝術の





核をなすべきものであるから簡單に述べて置く。其の由來については、既に建築の節で述べたが、現在の地に着手したのは、天平十七年八月二十二日の事で、十九年九月廿九日に始めて鑄鎔し、天平勝寶元年十月二十四日鑄造を畢つた。此の最後の年の二月陸奥國から黃金を献じ、天皇が大に喜ばれた。三ケ年八ケ度御體を鑄奉ると記錄にあるのは、八分して鑄たことを云つたのであらう。天平勝寶三年六月螺髮をつくり、四年三月十四日始めて金を塗り、同年四月九日開眼供養を行はれた。大佛を鑄造した人は、大佛師從四位下國公麻呂、大鑄師從五位下高市大國、國高市眞麻呂、同柿本男玉等である。公麻呂は百濟の亡びる時歸化した德率骨富の孫である。大佛の大さは、高さ五丈三尺五寸、面長一丈七尺、廣九尺五寸、鼻高三尺、眉長五尺四寸五分、目長三尺九寸、口長三尺七寸、頤長一尺六寸、耳長八尺五寸、頸長二尺六寸五分、肩徑長二丈八尺七寸、胸長一丈八尺、腹長一丈五尺、臂長一丈九尺、肘

至腕長一丈五尺、掌長五尺六寸、中指長五尺、脛長二丈三尺八寸五分、膝前徑三丈九尺、膝厚七尺、足下一丈三尺、螺形九百六十六個、高各一尺、徑各六寸。以上は大佛の體各部であるが、座は銅座高一丈徑六丈八尺、上周二十一丈四尺、基周二十三丈九尺、石座高八尺、上周三十四丈五尺、基周三十九丈五尺。圓光は高さ十一丈四尺、廣九丈六尺あつた。猶材料としては、熟銅七十三萬九千五百六十斤、白蠟一萬二千六百十八斤、鍊金一萬三十六兩、□銅五萬八千六百兩、炭一萬六千三百五十六斛と記されてゐる。脇侍は東が觀音、西は虛空藏で、高き各三丈の乾漆座像、四天王も高さ三丈の乾漆彩色像であつた。此の大佛は鑄造後百餘年を經、齊衡二年五月頭が落ち、貞觀三年三月修繕して開眼し、治承四年十二月平重衡の兵火に罹り、頭と左手と燒け落ち、壽永二年六月宋人陳和卿之れを修繕し、文治元年八月開眼した所、永祿十年松永久秀の亂に燒け大破した。それから山田道安なる人が頭を木で造





り、銅板を張つて假修繕をなしたが、貞享、元祿の頃、公慶上人が胸以上を改鑄し、寶永九年九月成り、十年三月開眼供養を行つた。これが現存のものである。蓮辨十餘枚に過ぎない。從つて當初の表現は全く見る事が出來ないが、其の蓮辨も六七分はこの時の改鑄で、天平當初のものは、胸以下胴體と手法は胴體によつて多少わかる。又蓮辨には一枚毎に筋彫があつて、其の樣式手法をみる事が出來る、それは所謂三千大千世界の圖を毛彫としたもので、手法流暢、表現は優麗、天平時代の特色を現はしてゐる。

**法華堂の諸佛**

次に主な遺物を述べるが、先づ當代の彫刻の寶庫ともいふべき東大寺法華堂內の諸佛について述べやう。法華堂は天平五年聖武天皇が良辨僧正の爲めに建てられたもので、其の本尊不空羂索觀音は、同僧正の作と傳へられてゐる。高さ一丈二尺の乾漆立像で、八角の壇上に立つてゐるので、中々高く仰がれる。三目八臂で、莊嚴な姿勢を有し、體格の比例よ

く整ひ、面相も圓滿であつて、三目も奇怪の表現を作らず、種々の點で天平時代の特色を現はしてゐる。良辨僧正の作であるかどうか固よりわからないが、堂の建築と同時代のものと考へられる。其の寶冠は非常に立派なものであるが、工藝美術の節で述べる。光背も珍らしい形を持つてゐる。此の本尊の脇侍は、梵天と帝釋で、高さ一丈三尺三寸の乾漆立像である。相當の作ではあるが、別に本尊のすぐ脇に立つ日光、月光が非常に傑作なので、あまり目立たない。併し調和した體格、圓滿な表現に時代の特色を示してゐる。仁王即ち金剛、密迹二力士も乾漆立像で高さ一丈、冑を着し彩色が施され、頗るよく保存されてゐる。四天王像も同じく高さ一丈の乾漆立像で、これ亦冑の彩色がよく殘つてゐる。これら仁王、四天王とも體格の比例よく、姿勢もよく出來て居り、憤怒相もよく現はれてゐる。元來天平時代の彫刻は、菩薩彫刻に最も應はしい樣式、手法のものであるが、斯かる天部彫刻にも亦優れ





た技倆が發揮されてゐる。又これらの彫刻に施されてゐる彩色模樣は、寶相花の外幾何學的模樣も種々あり、繧繝彩色多く、天平時代の文樣を見るべき最もよい遺物で、其の意匠線條色彩とも立派なものである。以上本尊、脇侍、仁王、四天王が本堂に屬する諸尊で、同時代の作と見るべきである。次に本尊と同じく八角壇上に立つてゐる日光、月光兩菩薩は、高さ六尺八寸の塑造立像で他の諸尊に比して著しく小さく感ずるが等身よりやゝ大きく、其の體格の比例は申分なく、面相は殊に傑出し、圓滿にして崇高、月光(梵天)は殊に傑れ當代の傑作たるばかりでなく、我が國彫刻中第一流の傑作で、古來有名なもの、彼の樗牛をして、「男女神人の特相を絕し空靈超脫の威嚴を表はす」と讃美せしめたものである。蓋し寫實と理想とを巧に調和した點に於いて最高位置を占むべき作である。尤も塑造といふ材料が餘程その表現を助けてゐると思ふ。奈良帝室博物館に出陳の法隆寺の塑造二軀も、當代の特色を供へ

た佳作である。最後に本堂背面の厨子中に安置せらるゝ執金剛神は、良辨僧正の念持佛と傳へられ、古來秘佛であつた。高さ五尺五寸の塑造で、右手は劍を握つて高く、左手は拳を握つて下げた姿勢勇躍し、口を開き、眼をみはつた面相は憤怒相をよく現はしてゐる。かの梵天が靜を現はすものとすれば之れは動を示し、兩極端に於いて天平時代を代表する双璧と云ふ事が出來る。冑の彩色もよく殘つてゐる。

**其他の遺物**

天平彫刻の寶庫とも云ふべき法華堂の諸佛について述べたから、次に當代の主なる遺物について略述するが、先づ左に之れを列擧してみやう。

東大寺戒壇院　四天王
新藥師寺本堂　十二神將
唐招提寺金堂本尊　盧舍那佛





同寺金堂　藥師　千手觀音
法華寺　本尊十一面觀音
同寺　維摩像
東大寺　伎樂面
同寺西大門額緣天人四天王仁王等八軀
同寺大佛殿前金銅燈籠火袋蓋浮彫音聲菩薩
聖林寺　十一面觀音

右の中　東大寺戒壇院の四天王は、塑造で、體格の比例と云ひ、姿勢と云ひ、面相と云ひ申分のない傑作、法華堂の四天王よりは、形は小さいが寧ろ優つた作で、天平時代天部彫刻を代表すべきものである。藥師寺本堂の十二神將も亦塑造で、十二軀が巧に圓形佛壇に配置されてゐるが、内一體は後世のものである。體格、姿勢、面相等天平時代の天部彫刻として前記四天王に

亞ぐ優作である。唐招提寺金堂本尊は、同寺の創建者たる鑑眞和上が率ゐて來朝した法進、法載、思託、如寶、義靜、軍法力等二十四人の中、彫刻に巧な者があつて、其の手によつて作られたと傳へられる。乾漆の盧舍那佛座像で、手法、表現とも他の天平時代のものと異り、多少强い點があり、森嚴の表現を持つてゐる。此の本尊の左の脇侍は藥師、右の脇侍は千手觀音である。共に乾漆であつて、藥師の方は本尊と同樣の形式であるが、千手觀音の方は、之れと違ひ、寧ろ法華堂式のもので、千手觀音として代表作である。猶同寺講堂の本尊は鎌倉時代のものであるが、二天は軍法力の作と傳へられ、普通の天平時代の作風と違つてゐる。猶同寺に藥師、十一面觀音がある。法華寺本堂の本尊十一面觀音は高さ三尺二寸の木彫立像で、古來秘佛となつてゐて、よく保存されてゐる。頗る精妙な作であるが、其の表現にも手法にもやゝ强い所があるので、弘仁初期の作と考ふる學者もある。何れにしても森嚴の中





にも觀音の慈悲を示した傑作である。同寺の維摩像は、當代に始めて作られた人物彫刻の傑作の一つである。肖像彫刻ではあるが、固より實際の寫生によつたものではなく、作家の理想を現はしたものであらう。併し佛像と違つて、自由な姿勢をとり、寫生風な表現を持つてゐる。此の外、當代の肖像彫刻としての遺物に岡寺の義淵像、法隆寺夢殿の行信像、東大寺開山堂の良辨像、唐招提寺開山堂の鑑眞像等があり、何れも佳作であるが、良辨像が最も傑れてゐる。東大寺の伎樂面は二十面以上あるが、正倉院のものと共に嚴密に云へば工藝美術の木工品として取扱ふべきものである。尤も何れにしても其の傑れた價値に變りはない。表現は佛像や肖像には見られない誇張があり、其處に一種の力がある。東大寺の勅額は中央に金光明四天王護國之寺と二行に書き、緣に天人、四天王、仁王等八軀の小木像を付してある。全體としてはこれも工藝美術として取扱ふべきものであるが、八軀の小像は立派な彫刻で

ある。同寺大佛殿前の大燈籠は、勿論工藝美術の金工品であるが、其の八角の火屋の扉に菩薩走獸等を鑄出してある。其の音聲菩薩などは立派な浮彫で、姿勢、面相等當代彫刻の特色を現はしてゐる。聖林寺の十一面觀音像は、もと三輪大神神社の別當寺大御輪寺の本尊だつたのが後に當寺へ移されたもので、高さ六尺九寸ある木身乾漆で、體格の比例よく、手法は流暢であり、面相の表現も乾漆として上乘のもので、天平時代の特色を最もよく示してゐる。蓋し當代代表作の一つとして差支ないものである。猶當代彫刻の遺物としては、秋篠寺の梵天と帝釋天と伎藝天の頭部(乾漆)、室生寺の彌勒、東大寺の彌勒、多寶佛、法隆寺の彌勒、同寺寶藏の彌陀其他數多あるが、時代の特色を代表すべきものは、東大寺法華堂のものを始めとし、本節に說明した數軀である。新藥師寺の本尊も、當代の作と傳へられるが、これは恐らく弘仁初期のものであらう。





## 四　繪　畫

### 概觀

天平時代は、前述の如く建築に於いて發達の最高潮に達し、彫刻に於いても黃金時代を現出したが、繪畫は遺物が尠いので十分わからないが、恐らく建築や彫刻の如く發達しなかつた樣である。尤も次に述べる二三の遺物には見るべきものがあり、又諸大寺の献物帳や資財帳によれば相當に描かれた事がわかる。卽ち東大寺献物帳には山水畫屏風、古樣宮殿屏風、大唐勤政樓前歡樂圖、烏毛立女屏風等十五種の屏風の名がある。しかもそれらは多く非宗教畫で、山水畫、風俗畫と見るべきものであるから相當に發達した事は明かである。併し次代に比べると、當代は猶準備時期で、到底建築や彫刻の黃金時代には及ばない。さて當代の繪畫は彫刻其他の美術と同じく唐の影響を强く受けたもので、印度、西域の影響は前代の如く明瞭で

なく、寧ろ間接に過ぎない。佛菩薩等の面相は、其の豊滿な表現に於いて全く唐風である。次に主な遺物について述べやう。

**過去現在因果經**

これは始め五卷あつたのであるが、今は三卷殘つてゐる、即ち三の卷が醍醐の三寶院に、一の卷の上半が京都の上品蓮臺寺に、四の卷が東京美術學校に藏されてゐる。此の製作年代については、從來諸說あつて、或は飛鳥時代と云ひ、或は聖武天皇の筆と傳へ、或は聖德太子の作だとも云ふが、今は天平年間とする人が多い。それは第三卷の軸附に、……月七日寫書生從八位とあるが、寫書生に叙位の始まつたのは、天平年間であるからで、又實隆公記に天平七年勅筆也とあつて、天平七年說が有力であるが、何れにしても天平年間の作である事は確かと考へられる。この繪卷は、釋迦の傳記たる過去現在因果經の本文を下段に書き、上段にその意味を繪畫で描き現はし、釋迦の繪傳とも云ふべきものである。繪畫には樓閣、山水、佛像、





人物等があり、群青、胡粉、朱、綠青、雌黃、岱赭等の繪具を用ひ、其の手法は頗る簡單であるが、古拙幼稚の點が面白い。又彩色の單純な點も面白い。此の繪は、平安朝以後盛になつた繪卷物の形式を示すもので、これが果して次代の先驅となつたものかどうかはわからないが、事件の推移を長卷によつて示す繪卷の最古のものとして、又遺品少き當代の繪畫として貴重なものである。

**藥師寺吉祥天**

これはもと藥師寺の鎭守であつた八幡社にあつたもので、寺傳によれば、年々行つた吉祥會の本尊たりしものである。藥師寺で始めて吉祥會を行はれたのが、寶龜三年(七七二)壬子正月一七日だつたので、此の繪の製作も此の頃と考へられる。或はそれが想像に過ぎないとしても、當代の作である事は疑がない。竪一尺七寸、横一尺五寸の小さな畫面であるが、極めて細密な麻布の上に、丹、朱、綠青、紫等の繪具を用ひ、截金(きりかね)も多

少應用されてゐるらしい。姿態優美、面相豐滿、彩色鮮麗で、吉祥天女といふ題材にもよるが、佛教的繪畫であつて、しかも風俗畫的の効果を持つてゐる。それは藤原時代の彫刻ではあるが、淨瑠璃寺の吉祥天女像にも同じやうな點があり、兩者は時代も異り、繪畫と彫刻との差はあるが、同じ題材のものとして比較すると興味がある。猶此の畫の衣裳の文様には、繻繝彩色の寶相華や菱形が描かれてゐる。要するに此の畫は、小品であるが(或は多少周圍を切り小さくなつてゐるのかもしれない)、當代の特色をよく發揮し、他に遺物が鮮いので、非常に貴重なものである。

**其他の遺物**

正倉院には當代の繪畫及び參考となるべきものが相當にある。先づ第一に擧ぐべきは、北倉階下の北側にある鳥毛立女屏風である。これは松下美人圖とも稱され、墨繪で樹下に美人の立つてゐる樣を描き、簡單ながら一種面白い構圖をなしてゐる。美人の面相は吉祥天と似てゐるが、





線が太く、吉祥天が細い線で、彩色を主としたのと違つてゐる。樹木岩石には殊に筆法を現はしてゐる。美人の頭髪に鳥毛を附けてあつたので、鳥毛立女屏風と云はれてゐるのであるが、今は殆んど剝落してゐる。此の樹下美人の題材、構圖は、唐に於いてよく行はれたものらしく、支那に於いても屢々發見され、其の美人は唐の瓦俑人物と同じ樣な表現を持つたものである。次に南倉階下にある布地墨畫觀音圖は、麻布地に雲上に趺座した觀音を描いた珍らしいものである。猶北倉階下に鳥毛立女屏風と共にある山水、鹿、草木、鳥木、鳥草等種々の夾纈及蔕纈屏風は、工藝美術に屬するものであるが、裝飾畫として當時の圖案的意匠を見る事が出來、其のデザインの秀拔な點は注意すべきものがある。又純然たる工藝品ではあるが、其の裝飾文様には繪畫の參考となるものが多い。例へば北倉の金銀平文琴に於ける人物、鳥、蝶、走獸、樹木草花の如き、琵琶の表面に於ける駱駝人物の如き、中倉の紅牙撥

鏤尺に於ける伽陵頻迦、蓮、山、鳥、樓閣の如き、金銀平脫皮箱に於ける尾長鳥の如き、彈弓の弓身に於ける一種の風俗畫の如き、南倉の紫檀木畫琵琶に於ける胡人虎狩圖の如き、密陀僧辛櫃に於ける兎、孔雀、草花の如き、狩獵文紫地錦に於ける獅子狩圖の如き主なものである。勿論これらは全部が我が天平時代の製作品でなく、或は將來品もあるかもしれないが、大部分は當代のものと考へられる。當麻寺の極樂曼荼羅は普通繡と考へられてゐるが、繪畫だと見た人もある。何れにしても、赤、綠等の色の上に金泥で模樣を現はし、非常に精緻な立派なもので、大いさは一丈三四尺ある。本尊脇侍以下三十七尊を現はし、面相は東大寺大佛蓮辨の毛彫と似て居り、極樂曼荼羅中最古のものである。唐招提寺の梵天臺座に樂書があるが、それは人物や動物を亂雜に描いたものであるが、不用意の中に面白味があり、筆勢の强いものである。東大寺大佛の蓮座の毛彫については既に彫刻として述べたが、これ





は毛彫であるから繪畫に近いもので、其の線條、表現は、線で描いた繪畫と殆んど同樣に考へられる。

## 五　工藝美術

**概觀**

當代の工藝美術は、發達の最高潮に達した建築、及び黃金時代を現出した彫刻と同樣に大に進歩し、其の意匠、技術とも頗る見るべきものがある。蓋し工藝美術は、建築と彫刻に附屬するものが多いので、兩者の發達につれて發達するのは當然である。それは云ふ迄もなく佛教に關するものが多いが、非宗教的のものとして、武器、樂器、食器、服飾品、文具、調度、遊具などもある。之れを技術から分類すると、木工、漆工、金工、陶工、玻璃工、牙工、石工、染織工等にわかれる。其の樣式は、建築、彫刻及び繪畫と同じく唐の影響著しく、更らに波斯薩珊系の影響が可なり著しく

現はれてゐる。この點は建築や彫刻や繪畫とは、多少趣を異にしてゐる。蓋し工藝美術の作品は、比較的小さいのと、裝飾文様を多く用ゐるといふ點で、遙かに遠く波斯や薩珊の影響を受けやすく、又將來品も多く、これを模倣した爲めであらう。而して今日現存する遺物の中にも、將來品が混入してゐるだらうと思ふ。猶工藝美術について一つ注意すべき事は、當代の遺物が質量共に、實に驚く程保存されてゐる事で、殊に其の保存のよかつた事である。それは云ふ迄もなく、正倉院に御物として保存された三千餘點である。殆んど奇蹟とも云ふべき事で、勅封であつた事や天災を免れた事にもよるが、主として我が國の國體、皇室の尊嚴から來た事で、實に我が國の寶庫であるばかりでなく、東洋否世界の至寶として誇るべきである。

**正倉院御物**

其の正倉院御物が、毎秋の曝凉に際し、去る大正八年から民間の有志に對し詮衡の上拜觀を許可される樣になつた事は、研究家、





鑑賞家に對して誠に福音である。私は大正九年と大正十四年と二回拜觀し、最初の拜觀記は拙著『古美術行脚』宮島より平泉へ』の中に收めてある。『正倉院志』や『正倉院の栞』なぞもよい參考書であるが、拜觀に際しては、大正十四年帝室博物館で刊行された『正倉院御物棚別目錄』が最も便利である。さて正倉院御物中當代の製作と認むべきもの〻主なものを述べるのであるが、何分澤山あるので、種類別に極めて主なものだけを擧げて置く。まづ木工では中倉に彩色した箱類が數多ある、密陀僧彩繪箱、綠地彩繪箱、蘇芳地彩繪箱、粉地彩繪箱等の類で、其の模樣は多く草花、鳥、蝶、寶相華なぞ、鮮やかな彩色を用ひ、繧繝彩色も用ひられてゐる。几類も彩色美しく、格狹間や花脚も美しい形を持つてゐる。又木畫と稱するのは一種の木象眼で、人物動植物を現はしたもので沈香木畫箱、紫檀木畫箱、朽木菱形木畫箱なぞの類である。又北倉階上に伎樂面が數十あるが、これは東大寺のものと共に彫刻としても見

られるものである。次に漆工は樂器に多く、北倉の金銀平文琴、阮咸、琵琶等で、螺鈿を加へたもの多く、又北倉階上の鏡十八面の螺鈿は、各々意匠を異にし何れも立派なものである。乾漆の伎樂面も亦漆工の中に加ふべきものである。金工は太刀の裝飾に多く、中倉の階上にある、又南倉階下に金銅鈴、金銅幡、金銅雲花裁文、金銅鳳形裁文、幢幡鉸具等があり、階上に金銅花形合子がある。陶工は藥壺、合子などあるが、唐の將來品が多いやうである。石工として一個頗る興味あるのは、北倉階下の白石鎭子八箇で、四神十二支を浮彫とした大理石らしいものであるが、恐らく將來品であらう。染織工は前に繪畫の參考品として述べた夾纈、蒲纈の屏風の外、南倉階下に錦類が數多あり、中で狩獵文紫地錦は、長一尺六寸三分、巾一尺五寸三分の大いさを有し、馬上に武裝の獵手が獅子狩をしてゐる圖を對照的に現した面白いものである。猶象牙や犀角を用ひた牙工品、翡翠、瑪瑙、琥珀、水晶、珊瑚、眞珠





等を用ひた貴石工とも稱すべきものが澤山ある。

**其他の遺物**

次に正倉院の御物以外の當代工藝美術について述べやう。先づ木工としては、既に述べた東大寺の勅額及伎樂面の外、般若寺の扁額は曲線の輪廓を廻らした簡單なものである。佛像の背光、蓮座としては、唐招提寺金堂本尊及び千手觀音の背光が美事な透彫を持つてゐる。前者は雄健な火炎唐草を現はし、後者は忍苓と寶相華とを用ひてゐる。漆工として法隆寺彌勒像の背光が乾漆であるが、それは後世の鏡のやうな形をなし、上部の圓形のところには中央に鳳凰を現はし周圍に雲を配し、下部には寶相華を現はし、其の意匠が巧である許りでなく、技巧も中々優れてゐる。金工としては先づ東大寺法華堂本尊の寶冠がある。徑二尺、全部銀の透彫で其の文樣は寶相華で、透彫の間に水晶、瑪瑙、眞珠、琥珀等の珠玉無慮二萬餘を鏤め、精巧驚くべきものであるが、正面には八寸許りの佛像を附し、それが光背、

蓮座を具備し、中々よく出來てゐる。次に東大寺大佛殿の大燈籠は、高さ一丈三尺、火屋は八角で、其の周圍に菩薩、走獸を鑄出してある。其の菩薩の姿勢、面相等、當代の特色を現はし、彫刻の節に擧げた通り、浮彫としてみる事の出來るものである。興福寺の華原磬は、もと其の西金堂に安置されたもので、今は奈良博物館に陳列されてゐる。高さ六尺二寸五分、座獅子を臺として其の背上に八角柱を立て、之れを四匹の龍が蟠結環狀をなし、其の中に金鼓が懸けてある。其の意匠卓拔、手法精緻、當代工藝美術の粹であるが、其の作家が果して我が工藝美術家であるか否かは確證がない。法隆寺夢殿の寶珠露盤は、建築と同時の立派な作である。鐘には法隆寺東院、新藥師寺、園城寺、越前劍御子寺等のがある。猶金工として東大寺灌頂盤と西大寺舍利塔とが共に見るべきものである。陶工は正倉院の項で述べた外、瓦に鬼瓦の遺物として、藥師寺本堂、東大寺轉害門のもの現に屋上に載せられてゐるが、





何れも豪健の手法を以つて鬼面を現はしてゐる。鴟尾には唐招提寺金堂のものが一つ丈け遺つてゐる。

## 六　天平美術の特色と價値

**四種の特色**

前の白鳳時代は過渡期であつた、それは當代、即ち天平時代に對する過渡期であつたので、それを經て當代は完成期に到達した、換言すれは天平美術は一つの爛熟時代を現出したのである。即ち我が美術史上に於ける最初の黃金時代である。この爛熟時代、黃金時代である事が、天平美術の特色の一つである。第二の特色としては、飛鳥、白鳳から引續いて模倣時代である事であるが、其の模倣は唐を對象として直接之を模倣したのであるが、美術の種類によつては、唐に影響を與へた印度、波斯、薩珊等が唐を通して更らに我が國へも影響を與へてゐる。何れにしても模倣美術であ

るが、流石に爛熟期だけあつて、唐に優るものを作り、所謂藍よりいでゝ藍より青いものが尠くない。それは價値を述べる際に讓つて置くが、飛鳥、白鳳、天平、更らに次の弘仁時代までも及ぶ模倣時代の中でも、最も光つて居るのは天平時代である。而してその天平時代の美術が、主として佛教に關するものである事は前二時代と同樣であるが、當代は所謂南都六宗が揃ひ、帝室を始め一般の信仰も極點に達したので、佛教美術も亦全盛を極め、これを第三の特色とする。最後に意匠、手法、表現の上の特色であるが、意匠は概して自由にして秀拔、手法は雄健にして流暢、圓熟を極めて居り、表現圓滿にしてしかも崇高、巧に寫實と理想との調和に成功してゐる。

**四種の價値**

すべて藝術の盛衰には、先づ勃興時代から過渡期を經て黃金時代を現出し、ついで衰微期に達するのが普通である。而して勃興時代には氣力があつて、一種潑溂たる英氣があるが、固より幼稚の點あるを免





れず、而してそれの進歩發達する途中は即ち過渡期で、其の價値は主として發達の上に在るのである。次にそれが發達の頂點に達し、爛熟期に入り、即ち黃金時代を現出し、特色は十分に發揮され、最高の價値を持つやうになるのである。我が天平美術は即ち第一次模倣美術の黃金時代であつて、最高の價値を有するのである。例へば建築に於ける唐招提寺金堂の如き、惜しむらくは第一流の伽籃ではないが、日本建築中第一流の傑作であり、彫刻に於ける法華堂の塑造梵天の如きは大傑作である。又正倉院に藏せらるゝ工藝品の如きも黃金時代の製作として誠に立派なものである。第二に天平美術は、模倣美術であるから獨創といふ點からは價値に乏しいやうであるが、所謂出藍の傑作を作り出し、古今東西を通ずる大傑作の現はれた事には、高き價値を與へざるを得ない。例へば前に擧げた唐招提寺の金堂、法華堂の梵天、正倉院の御物を始め、建築としての法華堂、法隆寺夢殿、彫刻に於ける法華堂の

諸佛、東大寺戒壇院四天王、新藥師寺十二神將、繪畫に於ける過去現在因果經、藥師寺吉祥天など、何れも第一流の藝術品としての價値を持つてゐる。第三に天平美術は佛教美術であるが、次代の密教美術、次々代の淨土教美術又其の次の禪宗美術と異り、所謂南都六宗の美術として、他の佛教美術と異る特色と價値とを持つて居る。殊に彫刻に於いては弘法大師の儀軌將來以前のものとして自由な點がある。これは第四の意匠、手法、表現に於ける價値の一つとする事も出來る。意匠の自由、秀拔な點は、工藝品に著しく、手法の雄健な點は、建築に十分發揮せられ、流暢にして圓熟せる點は彫刻に見るべく、表現の圓滿にして崇高、巧に寫實と理想との調和を示した絶好の例は屢々擧げた法華堂の梵天である。之を要するに天平美術は、日本美術史上一つの黄金時代として、絶大なる價値を有するのである。



# 第五章　弘仁時代

## 一　時代の大勢

**概觀**

弘仁時代は、桓武天皇の延暦十三年（七九四）平安京奠都に始まり、宇多天皇の寛平六年（八九四）遣唐使の廢止に終る。其の間丁度一百年、之れを弘仁時代といふのは、嵯峨天皇の年號からとつたのであるが、清和天皇の年號によつて貞觀時代と云ふ人もある。平安京へ奠都したところから平安朝時代が始まるとすれば、この百年を初期、又は前期とし、次の藤原時代を本期とするのであるが、美術の性質からみると、弘仁時代は猶唐の影響を脫却しないながらに日本化の傾向をも生じ、模倣から同化へ移る過渡期であつて、私は寧ろ飛鳥時代に始まつた模倣時代が白鳳、天平の兩時代を經て、猶弘仁時代までつゞき、藤原時代に至つて新しく同化時代に入るとする者である。併し帝都の移動は、政治、宗教、其の他文化の上にも變化を生

じ、すべての點で天平時代とは大分違つてゐる。平安京の事は次に一項を設けて述べるが、佛教で新に興つた天台、眞言の二宗は、從來の南都六宗と大に趣を異にし、從つて之れに關する美術も亦新しい特色を帶ぶるに至つた。

**政治と外交**

天平時代の末期は、財政疲弊し、驕臣の擅權相つぎ、光仁天皇は政教一致を廢し、漸く朝政を刷新し、次に桓武天皇の平安奠都となつたのである。即ち弘仁時代劈頭の大事件は、此の奠都といふ事であるがそれは後に讓り、奠都後先づ行はれたのは蝦夷征伐で、これは坂上田村麿の力によつて成功した。次の平城天皇は六道觀察使を置き、兵制の改革を行はれ、嵯峨天皇は藏人所を置き、弘仁格式を定められた。かくて京都も追々繁榮に向つて來た、此の藤原氏が漸く勢力を得て來た事は、藤原時代をつくる因として注意すべきである。飜つて支那の有樣をみるのに、唐朝は既に二百年に垂んとし、安祿山の反亂についで史思明の亂があり、文化も漸く下り坂





となり、我國との交通は依然盛んであつたが、我が文化も進んで來た爲め、前代までの樣に、すべてを彼に學ぶといふ程ではなかつた。而して後に述べる平安京の經營にしても、天台、眞言二宗の宗義にしても、又文學にしてもすべて唐心醉から醒めて日本的となり、つひに菅原道實は自ら遣唐使に選ばれてゐながら、建白して之れを止むるに至つた。かくて弘仁時代の終ると共に唐も亡びて後梁の太祖が立つた。

**佛教の大勢**

佛教は天平時代に於いて政治と一致し、朝廷の優遇を受け、其の勢頗る盛大であつたが、其の半面に於いては、或は法式を破り、或は山林水澤の利を擅にし、墮落する者も多かつた。而して帝都たる奈良に於いてこそ其の勢力は强大なるものがあつたが、地方には未だ十分浸潤してゐなかつたので、京都に奠都し、政治の中心が新都に移つてからは、南都佛教の勢力は著しく墜ち、新興二宗の勢力がこれに代るに至つた。二宗とは即

ち空海弘法大師の眞言宗と最澄傳教大師の天台宗とである。此の二大師は當代の初め相携へて入唐し、空海は二年、最澄は一年在唐して歸朝し二宗を開いたのである。而して此の二宗とも支那の佛教とは同一のものでなく、日本的解釋を加へたもので、所謂複元的日本佛教である。前代までの佛教、即ち南都六宗は單元的支那佛教であつた、しかも教義に於いて異るばかりでなく、堂塔の配置、平面、裝飾、佛像の種類、表現等も各々相違し、伽藍の位置も南都佛教は平地佛教(都市佛教とも云ふ)で、平地に整然と配置され、天台眞言の二宗は山嶽佛教で、山上に自由に配置された。之れらの事は後に詳說する。

**傳教大師と天台宗**

傳教大師は、神護景雲元年江州に產れ、幼い時は近江の國師行表大德に隨ひ、後南都に赴き、始めて鑑眞和尙將來の天台の經釋に接し、二十歲で叡山に入り草庵を結び、延曆七年自ら藥師如來を刻み、佛殿を營んで之れを安置した。これ延曆寺の草創で、この佛殿が根本中堂である。





十三年其の大供養會を行ひ、次で南都の十大德を山上に請じて法華十講を行ひ、更らに神護寺の法華會に臨み、盛に天台の趣旨を發揮し、大に名が揚り、天皇も深く感ぜられた。廿三年遣唐使藤原葛野麿に從ひ、弘法大師と共に入唐し、先づ臺州天台山に赴き、修禪寺の道邃、佛隴寺の行滿によつて圓教を傳受し、且つ菩薩大戒を受け、在唐一年にして歸朝し、勅によつて南都大德八人の爲めに天台の法文を講じ、又神護寺に法壇を築き、道證、修圓、勸操、正能等の八大德に灌頂を授けた、これ我が國灌頂の嚆矢である。猶大師は叡山に十六院建設の計劃を立て、全國六ケ所に寶塔院を創建し、「法華經」各一千部を安置し、毎日「金光明」「仁王」の二經と共に長講せしめて國家の安泰を祈願せしめた。又大師は別に叡山の上に大乘圓頓の戒壇を築かうとしたが、これは實現しない間に寂した。大師の天台宗は、支那の天台宗の上に更らに密禪の二宗及び菩薩の圓戒を加へたもので、名は同じでも、內容は違つてゐる

のである。

**弘法大師と眞言宗**

弘法大師は傳教大師に遲るゝ事七年、寶龜三年讃岐に生れた。幼にして儒教を外舅阿刀大足氏に學び、稍々長じて京都に出で大學に上り、儒書を讀んだが意に滿たなかつたのか佛教に志し、諸方を遊歷し、勸操僧正に師事し、後大和の久米道場で大日經を得、始めて眞言宗を研究する事となつた。而して儒道佛の三教に關する「三教指歸」の一書を著し、延曆十七年二十五歳で出家し、奈良の大安寺で三論宗を學んだ。夫から延曆二十三年、傳教大師と共に入唐し、長安の諸刹を歷訪してから、青龍寺の惠果阿闍梨について兩都大曼荼羅秘密法を授かり、猶般若三藏に謁し、居る事約二年、大同元年經論儀軌等を齎して歸朝し、まづ高雄の神護寺に於いて「仁王經」の大法を嚴修し、國家鎭護の祈禱をなした。これ大師最初の建壇修法で、これから大師の德譽四方に傳はり、諸大寺の學僧爭つて其の門に集つた。





それから弘仁七年紀州高野山に金剛峯寺を草創した。而して同十三年大師によつて平城太上皇は密乘の灌頂を受けられた、これ天皇密乘灌頂の嚆矢である。翌年東寺を大師に賜ひ、灌頂院とせしめ、教王護國寺と云つた。後に大師は諸弟子と共に此の寺に居つて堂塔を造營し、又屢々宮中に出入して、國家鎭護の祈禱、眞言秘密の法を行つた。後高野山に隱遁し、承和二年同所に寂した。抑も密教は初め印度の龍樹、龍智によつて起り、善無畏、金剛智、不空等によつて支那に傳へられ、唐の中頃頗る盛況に達し、我が國でも天平時代に既に之に傳へてはゐたのであるが、密教を專攻し、其の正統の秘訣を得て歸朝した者は、獨り弘法大師あるのみである。大師は密教の爲めに教相判釋をなし、佛教全體の密教に對する關係を知らしめ、佛教全體の究竟する所が密教にあることを明かにした。

**本地垂跡說**

神佛融合の說、卽ち本地垂跡說が旣に白鳳時代の末から出現し、天平時代にも行はれた事は前章に述べたが、當代に至つて益々擴張された。而して其の結果、佛寺に地主神、守護神として神社を勸進した。併しまだ神を佛の垂跡、佛を神の本地とする完全な神佛融合の考は行はれなかつた。これは次の藤初時代から藤末時代に至つて行はれるのである。

**文學**

天平時代にも唐の文學が移植せられ、漢文學は行はれたが、猶和歌も盛んで大歌人が輩出した。然るに當代に至つては全く漢文學全盛の時代となつた。先づ宗教界の偉人空海は、漢文學に於いても亦第一に擧ぐべき人で、其の詩文集には『性靈集』があり、詩文の議論には『文鏡秘府論』がある。嵯峨天皇も亦詩文に長ぜられ、勅選の詩集『凌雲』、『文華秀麗』の二集中には、當時の諸大家の作を網羅し、天皇の御製も中々多く入つてゐる。小野篁も詩に秀で、唐の白樂天と比べられる位であつた。又菅原道





眞も詩文に優れ、其の特色は漢詩の形式に日本趣味の內容を盛つた事であつた。併しこれは中々困難な事で、普通日本趣味の內容を現はすには漢詩よりも矢張日本の歌の方が便利なので、先づ短歌が行はれ、ついで一般國文學が昂頭して、次の時代は國文學全盛期に入るのである。かく當代末期に昂頭して來た國文學の方では、先づ歌人として、在原業平が現はれ、其の天眞の流露せる和歌は他人の追隨を許ざるものがある。業平と對立して、僧正遍昭や小野小町がある。小町は女性で業平より一層濃艶な歌を作り、遍昭は僧侶であるから自ら題材を異にし、又技巧的な所がある。其の外に大伴黑主、文屋康秀、喜撰法師の三歌人と合せて六歌仙と云はれてゐる。猶國文學の發達に都合のよかつた事は、片假名と平假名との發明で、『竹取物語』と『伊勢物語』の現はれたのも此の假名發明の結果である。此の二物語は平安朝物語の劈頭に來るもので、實に藤初藤末時代の物語全盛時代の先驅をなすもので、茲に

至つて漢文學は全く國文學の爲めに覆されたと云つてもよいのである。

## 二　平安京の經營

**奠都の由來**

白鳳時代に元明天皇が平城京に奠都せられたのは、永久の都とせらるゝ御考であつたが、平城京は規模大に過ぎたのか、奠都以來十餘年を經ても、未だ市街が充實するに至らず、聖武天皇の時には、難波、恭仁、紫香樂などゝ宮闕を作られて遷都の御心があつた。其の後は東大寺經營の爲め國努を傾けた爲めか、遷都の計劃もなく、遂に光仁天皇の朝政刷新の後を受け、桓武天皇に至つて先づ長岡京を經營された。併しこれは奠都献策者藤原種繼の横死によつて中止となり、改めて葛野郡宇太野の地を相して新都を經營し、延曆十三年十月二十一日車駕新都に遷り、奠都となつた。これ即ち平安京で、今の京都である。十四年大極殿が落成し、十五年正月始め





て同殿で朝賀があつたが、全部竣工したのは二十五年頃であつた。

**平安京の規模**

平安京も平城京の如く南北に長い矩形をなし、東西千五百四丈、南北千七百五十三丈、平城京よりは東西百丈、南北二百丈程廣い譯である。北邊中央に宮城をとり、宮城の南端中央から朱雀大路が南に下り左右兩京を分つのも平城京と同樣である。朱雀大路に並行して左右兩京に各三條の大路があり、北邊には二町毎に四條の東西に通ずる大路があり、それから南は四町毎に大路が八條東西に通じ、九條に分たれる。故に北邊の十町を除けば、餘は其の制、平城京と同じである。其他大路の間に三條の小路を縱横に通じた事や、坊の分ち方や坪の數へ方なども平城京と同樣である。京を圍つて羅城があり、夫れは築墻を中にし、内外に犬行を殘し、其の内外は湟となつてゐる。南端中央の羅城門を入れば即ち朱雀大路で、其の巾は二十八丈ある。尤も左右に築墻犬行等があるので、正味は二十三丈四尺である。

二條大路は十七丈、京極路十丈、他の大路は八丈、小路は四丈である。

**宮城の諸殿と配置**

宮城は北邊中央に位し、東西八町南北十町の廣さをもつてゐる。南朱雀大路に開いた門を朱雀門と云ひ、これと共に周圍に十二の大門を開く。朱雀門を入ると朝堂院（八省院）があり、其の西に豐樂院があり、朝堂院の東北に內裡があり、其の間に介在して諸官衙が建てられてゐる。朝堂院は八省院とも云ひ、國家の大禮を擧げる宮殿で、其の正殿は大極殿である。朝堂院は步廊（複廊）を以つて圍まれ一廓をなし、南大門を應天門と稱する。應天門は朱雀門の眞北五十丈の所に立つてゐる。それは五間三戸の樓門で、其の左右から步廊が起り、やゝ離れて左右に棲鳳樓、翔鸞樓がある。應天門を入ると廣場があり、左右には百官のつめる朝集堂があり、中央の北に會昌門が立ち、それを入ると廣い庭で、十二の堂舍が建ち列び、中央は殊にひろく、南庭といはれる。それから北は一段（六尺）高くなり、左右に龍尾





道を附し、其の間は勾欄で限られてゐる。左右の龍尾道を上ると、中央に大極殿が建つてゐる。大極殿は十一間四面、單層、四注の大建築で、床高く、中央に玉座があり、屋上に鴟尾を上げ、組物は三手先、軒は二軒、天井は化粧屋根裏である。裝飾は垂木、尾垂木の端に鍍金の金具を附し、堊壁、丹櫨、青櫟、朱欄、碧瓦の建築である。步廊は大極殿の左右につゞき、又龍尾道を上つてからは曲折して狹くなり、其の角に蒼龍、白虎の二樓がある。それから後方に小安殿があり、猶離れて昭慶門があつて、朝堂院の北端となつてゐる。棲鳳、翔鸞の二樓は、奇拔な平面と立面とを有し、蒼龍、白虎の二樓も屋上更らに三屋を載せた珍らしいものである。豐樂院は朝廷の宴會場で、又射禮等の儀式も行はれる。四方に築墻を廻らし、南に豐樂門がある。豐樂門を入れば、更らに儀鸞門があり、この門から步廊が起り、左右の東西廊に接してゐる。東西廊は各三つの建物を連ねて南北に延び、北は東に栖霞樓、西

に霽景樓によつて曲折し、中央の本殿に終つて居り、本殿の後方には、東に東華堂、西に西華堂がある。

**内裡の諸殿**

内裡は築墻によつて一廓をなし、其の中に更らに歩廊（複廊）を廻らし、それに四門を開く。南門を承明門と云ひ、之れを入れば正面に南面して内裡の正殿たる紫宸殿がある。次に仁壽殿があり、これが始め日常の御殿であつたが、後には西方に東面してある清涼殿が日常の御殿となつた。清涼殿の後方に用度を納める後涼殿がある。清涼殿の南に文書を司る校書殿があり、次に藥品を藏し、侍醫の居る安福殿がある。東にある綾綺殿は、時に天子の居給ふ所で、内宴などの席ともなる。其の後に溫明殿があり、内侍所又は賢所とも云ひ、神鏡を祀る。宜陽殿は一名を納堂と云ひ、御歴代の寶物を藏する。其の南に武具を藏する春興殿がある。猶仁壽殿の後方に承香殿がある。以上が内裡の表向の御殿で、これより北は皇后に屬する後宮で





ある。それは承香殿から廊によつて連絡してゐる。中央に常寧殿がある、以前は皇后日常の御殿であつたが、後には弘徽殿が日常の御殿となつた。常寧殿の後方に後宮の正殿たる貞觀殿がある。猶後宮に屬する殿舍としては、登花殿、麗景殿、宣耀殿、昭陽舍、淑景舍、飛香舍、凝花舍、襲芳舍等がある。之等の各舍の庭に梨や桐や梅や藤などが植ゑてあつた所から、之を梨壺、桐壺、梅壺、藤壺などゝ稱した。内裡の正殿たる紫宸殿は、九間四面、單層、入母屋造の建物で、床高く、正面に階段を有する。四方に廂があり、身舍の中央に玉座がある。玉座の後方には賢聖障子を立てる。天井は化粧屋根裏、屋根は檜皮葺で、大極殿とは餘程趣が違つてゐる。清涼殿は常の御殿であるから、又趣が變り、中央身舍を晝御座とし、隣に夜の御座があり、續いて皇妃上直所として、藤壺、萩戸、弘徽殿上の御局の三室があり、外に朝餉間、臺盤所、其の他の室がある。内裡の建物はすべて一個宛建てられ、渡廊を以

つて連絡するやうになつてゐる。これは支那の風であるが、平面は日本風で床を張つたり、屋根を檜皮葺にしたものも純日本風である。斯の如く平安京の內裡には日本風が行はれてゐるが、朝堂院に於いても大極殿に床を張つたのを始めとし、日本風の所があり、豐樂院は唐の宮城には全然なかつた。即ち我が平安の宮城は、唐の長安の宮城及び大明宮を模倣したものではあるが日本風に改めた所も頗る多い。而して平安京全部を長安京と比較しても、其の大體の形、條坊の區劃、其の數へ方等に於いて、我れの優つた點を發見する。蓋し平城京に於いて既に十分の經驗を得、唐の都については、十分日本の風俗を考へ、大に改良を施したのが我が平安京である。これも既に同化時代に入る前程として見られる。

## 三　建　築





**概觀**

弘仁時代の美術は、前の黃金時代たる天平時代の後を承けたのであるが、隋唐の模倣から一轉化をなした。それは主として新たに興つた天台、眞言の二宗の爲めであつて、無論佛教美術に於いてゞある。建築界に於いては、佛教建築以外に在つては、先づ宮殿建築が平安京宮城の新營があつたので大に發達し、住宅建築も其の新都によつて相當發達した事と思はれる。何れも當時の遺物が一つもないのは遺憾であるが、大極殿、紫宸殿、清涼殿等の宮殿や、棲鳳、翔鸞、蒼龍、白虎等の樓の建築は、當代の建築として注意すべきものであつた。此の中紫宸殿と清涼殿とは江戸時代の再建があり、大極殿と蒼龍白虎の二樓は、平安神宮として明治時代に再建され其の面影をしのぶ事が出來る。住宅建築の形式は判然しないが、次の時代に貴族の邸宅として現はれた寢殿造は、當代に育くまれたものであらう。神社建築が佛教建築の影響を受けて、春日造、流造の二形式を生じたことは、前

章に述べたが、當代から次代にわたつて盛につくられたので、別に項を設けて述べる。佛教建築は前代の如く建築の中心をなすもので、これも後に詳說する。

## 神社建築

春日造の範となつた奈良の春日神社は、前代の末葉に創設された事が明にわかつてゐる。それは切妻造の妻入、即ち住吉造に向拜をつけた形式で、現存の社殿は文久二年（一八六二）の再建であるが、矢張春日造の形式の模範となつてゐる。春日造最古の建築は、伯耆の三佛寺納經堂（藤末時代）である。流造は切妻の平入、即ち神明造に向拜をつけた形式で、前面の屋根が向拜まで續いて流れてゐるところから其の名を生じ、其の模範となつてゐる神社は、京都の加茂御祖神社であるが、これも現在の社殿は文久三年（一八六三）の再建である。單に流造の最古の建築は、奈良の春日若宮前の神樂殿（藤末時代）である。流造は側面からみる屋根の曲線が優美で、日本





趣味の發現したもの、明治神宮も此の形式によつてゐる。猶神社建築の形式として、日吉造と八幡造とが現はれたのも、當代から次代にかけてゞあるが、次章に述べる。

## 佛教建築

佛教建築は、依然として建築の中心をなし、殊に當代は新興の天台、眞言二宗の伽藍が盛んに建てられたが、其の遺物は唯一つ室生寺あるのみで、天台宗の本山たる延曆寺、眞言宗の本山たる金剛峯寺とも に再建であり、殊に後者の金堂は昭和元年十二月二十六日燒失した。併し兩寺の草創、規模等については、當代佛教建築唯一の遺物たる室生寺と共に別に項を設けて述べやうと思ふ。茲には當代に建てられた佛寺の主な名を擧げて置く。

| | | |
|---|---|---|
| 桓武延曆十三年 | （七九四） | 延曆寺 |
| 同　同十五年 | （七九六） | 東寺 |

桓武延暦十五年（七九六）　鞍馬寺
嵯峨弘仁七年（八一六）　金剛峯寺
淳和天長元年？（八二四？）　室生寺　金堂五重塔現存
同　四年？（八二七？）　觀心寺
仁明嘉祥三年（八五〇）　安祥寺
同　年（八五〇）　中尊寺
文德齋衡三年（八五六）　檀林寺
清和貞觀七年（八六五）　無動寺（叡山）
同　十六年（八七四）　貞觀寺
同　十八年（八七六）　大覺寺
同　末　年（八七七頃）　醍醐寺
陽成元慶元年（八七七）　元慶寺





光孝仁和四年（八八八）　仁和寺

**延暦寺の草創**

延暦寺は、「時代の大勢」中で述べた通り、傳教大師最澄が、延暦七年根本中堂を草創したのに始まる。大師は十六院及び大乘戒壇の建立を計劃したが、其の中の淨土院、相輪樓等を建てたのみで、弘仁十三年入寂して了つた。而して其後嵯峨天皇から延暦寺の勅額を賜り、淳和天皇の天長五年戒壇建立の勅許を得た。大師のあとは、義眞（天台座主の起原）が繼ぎ、天長元年大講堂を建立し、五年戒壇院を作つた。又義眞のあとを繼いだ圓澄は法華堂を建て、慈覺大師（圓仁）は文珠樓を作つた。猶慈覺大師は天長六年、横川の楞嚴院に中堂を起し、相應和尚は貞觀七年、無動寺を建立した、かくして叡山は大體四部に分れて伽藍が建てられた、それは

東嶺　東塔　止觀院（根本中堂、大講堂、戒壇院）
（傳教大師及義眞和尚建立）　（文珠樓、淨土院）

西嶺　西塔寶幢院（圓澄和尚建立）（釋迦堂、相輪樑、法華堂、常行堂）

北嶺　横川首楞嚴院（慈覺大師建立）（横川中堂、四季講堂、慧心院、定光院）

南嶺　無動寺（相應和尚建立）　明王院、大乘院

である。而して之等の堂塔の配置は、平地佛教のそれと異り、土地の高低其他を考へ、隨所に堂塔を建てたのである。故に對稱を破るばかりでなく、主な堂宇も必しも南面してゐない。例へば主たる東嶺をみるのに、根本中堂は東面して立ち、前に中門はあるが、夫れから起る歩廊は中堂の東面及び南面を限つて、西面と北面とには及んでゐない。次に大講堂は中堂の後方に南面してあるので、中堂とは直角に向いてゐる。猶後方に戒壇があり、中門の前





面に文珠樓がある。又西嶺の方は、釋迦堂が南面して建ち、其の前に、東に法華堂、西に常行堂が廊によつて連ねられ、俗にになひ堂と云はれてゐる。

次に天台宗佛殿の代表として根本中堂について簡單に説明しやう。現在の根本中堂は、江戸時代の初頭、寛永年間の再建であるが、平面は大體舊のものによつたのである。十一間六面の建物で、前の二間を外陣とし、其の床は板張であるが、内陣は石敷で床板なく、外陣よりは一段低くなつてゐる。さうして内外陣の境は、内に格子、外に板唐戸を以つて嚴重に區別されてゐるので、外陣から内陣を窺ふ事は出來ない。しかも本尊は内陣中央の佛壇上厨子の内に秘めてあるので、扉を開かなければ其の姿を仰ぐ事は出來ない。これを内外陣の區別を唯柱のみとし、本尊は直ちに壇上に仰がれる前代南都六宗や後代淨土教の佛殿と比ぶれば、其の差違は頗る著しい。宗旨の顯密の差はかく佛殿に明暗の差を生じたのである。而して單に平面のみならず、裝飾に

於いても兩者は相違してゐる。

**金剛峯寺の草創**

金剛峰寺は、弘法大師が弘仁七年勅許を得て草創した大伽藍で、其の金堂は八年起工し十年落成した。それから諸堂を建て、大師入寂後、眞然が其の計劃全部を完成した。猶其の後愛染堂（建武年間）大會堂（承安年間）東塔（白河天皇）孔雀堂（正治二年創建昭和元年燒失）等が附加された。而して之れ等の堂塔の配置は、延曆寺に於けるが如く、矢張對稱をとらず、地勢に隨つて建てられた。即ち金堂と大塔との位地は、前後でもなく左右でもなく斜に離れてゐる、金堂と大塔との位置さへさうであるから、他の東塔、御影堂、鐘樓、輪藏、孔雀堂、大會堂、三昧堂等の位置も、規則立つてゐない。從つて壯嚴の感じは弱いけれども、幽邃の感じは優つてゐる。金堂は前述の如く昭和元年十二月燒失したが、それは江戸時代の末期、萬延元年の再建であつた。今は亡き建築であるが、平面は創建の際と同じもので、方七間であるが、正面の二間と





左右後の一間づゝを外陣とし、其の內部五間四面を內陣とし、內外陣の間には格子戸をたて、後方三間は壁となつてゐる。本尊は後方の壁前に佛壇を置き、其の上の厨子內に安置される。猶佛壇の前に護摩壇を設け、其の左右に板壁を作り、それに右に金剛界、左に胎藏界曼荼羅を描く。此の兩界曼荼羅を壁に描く事は、眞言宗佛殿の特色である。內外陣の境界が嚴重の上に本尊が厨子內に秘められて容易に仰ぎ見る事の出來ないのは延曆寺の根本中堂と同樣である。尤もこの金堂の平面はやゝ特別のもので、眞言宗佛殿の平面としては、河內の觀心寺本堂（鎌倉時代再建）が適例であるが、これは同時代に至つて詳說するであらう。猶眞言宗伽藍では、金堂の外に必ず大塔を建てる。其の他稀に平地佛敎の如く、三重五重の塔を建てる事もあるが、多くは多寶塔である。現在金剛峯寺にあるのは西塔ばかりであるが、之も多寶塔で東塔も多寶塔であつた。多寶塔は二重で、下層は方三間の平面を有し、上層

は圓形で、屋根は寶形造である。大塔は多寶塔を大きくした樣なもので、方五間である。現在高野山に近い根來の大傳法院に大塔がある。これは室町時代の再建であるが、金剛峯寺の大塔を模したものである。これは方五間で、內部は圓形に柱を配し、これが上層の基となつて居る。多寶塔ではこの下層に於ける圓形の形跡がない。これが注意すべき點で、大塔は寶塔から進化したものだといふ事が明かにわかる。即ち寶塔は圓い平面を有し、土饅頭形であるが、大塔は之れに方形の裳層を附けたものと考へる事が出來る。而して多寶塔は大塔を小さくして、下層內部の圓形を略し、上層丈けに圓形を殘したものであらう。猶多寶塔の事は、其の遺物の所で詳說するが、他の宗派では決して建てない。金剛峯寺の大塔は、今礎石を存するばかりであるが、高さ十六丈と傳へられてゐるから、頗る雄大であつたらうと思ふ。





**室生寺の草創**

室生寺は、大和の初瀨の東方三里餘、四方山に圍まれ、溪流に臨んだところに在る。白鳳九年役小角の開基と傳へられ、其の後寶龜年間、興福寺の賢憬僧都が伽藍を建て、其の衰へたのを天長元年、弘法大師が再興し、堂塔を建てたと傳へられ、五重塔の如きは「弘法大師一夜造塔」と稱されてゐる、別に文獻の徵すべきものもないが、五重塔、金堂とも其の樣式、手法は當代のものである。但し兩建築は多少時代が違ふらしく、金堂はやゝ遲れてゐるらしい。配置は山間の森林中なので、自由である。まづ彌勒堂（鎌倉時代）があり、其の傍を少しく上れば金堂があり、其の後方段を上ると灌頂堂（弘安年間）がある。それから更らに段を上ると五重塔があり、猶八町程山を登ると奧の院で、其に開山堂（鎌倉時代）がある。此の寺は女人高野と稱せられ高野山が女人禁制だつたので、婦人は室生寺に詣でた。今でも女人講などがあるやうである。

**室生寺五重塔**

五重塔は普通の平面、即ち方三間であるが、甚だ小さく初層は方八尺八分しかなく、從つて塔身も高さ三丈八尺九分、相輪の長さ一丈五尺四分、合せて五丈三尺一寸、斯かる小さな五重塔は他になく、塔身丈けでは、普通の二階建位のものである。さうして高い老樹の下に立つてゐるので一層小さく見える。弘法一夜造と傳へられるのも斯く小さいからであらう。組物は三手先で、其の手法は唐招提寺のものと似てゐる。柱に比べて組物が高すぎるので、全體の高さが高すぎるが、屋根の勾配を非常に緩にし且つ軒の出を多くしてゐるので、全體としては釣合(バランス)もよくとれ、不安定ではない。且つ屋根が檜皮葺なので、輕快の感を與へる。勾欄を廻らしてゐるが五重目のものが多少昔の俤を存するのみで、他は後世の形である。內部初層の天井は、組入天井となつてゐる。此の塔で珍らしいのは相輪で、水煙がなく、其の代りに寶蓋と寶瓶とがついてゐる。頂上に寶珠のある事は、普通の





相輪と同樣であるが、其の下には寶蓋があり六方に手を擴げ、これに風鐸がついて居り、其の中に寶瓶が蓮座に載つてゐる。其の他は他の塔の相輪とほぼ同樣である。九つの胴輪には各々風鐸がついてゐるが、之れは他にも例がある。此の相輪は露盤、覆鉢、受華寺が鑄物で、他は鐵骨銅皮で出來てゐる水煙の代りに寶蓋と寶瓶とを有する相輪は、我が國ではこれが唯一のものであるが、支那雲岡には之れに類するものがある。此の五重塔は、第一に形が頗る小さく、森林を背景として、森よりも小さく、檜皮葺の屋根の勾配ゆるく、輕快にして可憐の情を起さしめる。

**室生寺金堂**

金堂は、元來六間四面、單層の建物であつたが、寛文、元祿の頃前に一間通りの建增をなし、現在の有樣となつてゐる。屋根も前には恐らく入母屋造で、檜皮葺だつたらうと思はれるが、今は四注で柿葺となつてゐる。內部も、もとは土間であつたに違ひないが、前方に建增した部

分が床を張り、勾欄を廻らしたので、舊の部分にも板を張つて了つた。組物は大斗肘木で、斗は比較的高く、肘木が低い。內部は內外陣を區別し、內陣に佛壇を設け、其の後は板壁となつて居り、それに帝釋天曼荼羅が描かれてゐる。此の建築は、後世の改築多く、十分當初の事を云ひ兼ねるが、全體の恰好は惡くなく、手法としては、五重塔よりやゝ遲れ、弘仁中期以役の特色を持つてゐる。壁畫及び彫刻にも當代の優秀な作があるが、それは後に述べる。室生寺の五重塔及び金堂は、弘仁時代の建築として二流若しくは三流のものに過ぎないが、他に遺物が無いので、此の時代を代表するものとして頗る貴重のものである。猶兩建築の年代が多少前後してゐるのも却つて變遷を知るのに都合がよい。又金堂は彫刻、壁畫を有するので一層價値を高める。

## 四　彫　刻





### 概觀

弘仁時代の彫刻は、前の天平の黃金時代の後を承け、その以上の發達は出來なかつたが、隋唐の影響が薄らぐと共に、新興の二宗が密敎であるので、其の感化を受け、手法に於いても表現に於いても、やゝ異る傾向となり、違つた特色を發揮した。種類は矢張佛敎彫刻が九割九分を占めてゐるが、新興の天台眞言二宗の爲めに、大日如來、不動明王、地藏、其の後密敎御修法の本尊として前代になかつたものが作られた。而して弘法大師によつて儀軌が將來せられ、從來自由であつた佛體の相好、衣相、印契持物等が悉く定められ、其の形式の下に作られる事となつた。これは前代彫刻との大きい相違點である。而して材料としては、主として木が用ひられ、前代に賞用された塑、乾漆の如きは全くなくなり、銅が少しくある許りである。此の材料が木である事は、手法に影響を與へ、從つて表現にも變化を生じた。即ち塑造や乾漆のやうに、自由に滑らかな手法を用ひる事が出來ず、

刀法が明かに現はれるやうになつた。表現は此の手法の變化からも影響を受けたが、一方で密教の教旨と御修法の本尊とされる所から、前代の顯教のものとは大に異る點を生じた。卽ち明いものが暗くなり、陽氣のものが陰氣となり、圓滿、豊麗なものが幽晦、森嚴のものとなつた。尤も密教は既に前代にも傳來してゐたので、前代の彫刻の內にも、寧ろ當代彫刻の表現を持つてゐるものがあつた。法華寺の本尊十一面觀音の如きその例である。又東大寺元千手堂本尊千手觀音の如く、それと反對に當代となつて、猶前代の特色を持つてゐるものもある。すべて單に特色から時代の前後を區別する事は必しも妥當でない場合がある。前代の末には既に次代の特色を帶びたものが現はれ、次代の初には必ず前代の特色を繼續してゐるものがあるのである。併し大體に於いて、天平時代と當代の佛教彫刻とでは、第一に題目、第二に材料第三に手法、第四に表現に於いて相違してゐるのである。猶佛教彫刻の外に





は、神像と肖像とが少しある。神像は神佛融合の結果として、寺の境內に地主神を置いたので、其の神體として像を刻んで安置する事が行はれたのである。肖像は前代と同樣高僧の像である。

**室生寺の諸佛像**

室生寺の金堂は當代の建築であるが、堂內に安置の佛像も當代のものである。本尊は釋迦で、これを中央に、右に藥師と地藏、左に文珠と十一面觀音と五軀並んでゐる。何れも木彫の立像で、彩色の光背を有してゐる。釋迦を見るのに、衣文の線を澤山並行し、それが高く彫り上げられ、形式的の表現を持つてゐる。文珠がこれと同樣の手法であるが、他の三體は異つてゐる。併し光背の繪が、釋迦と地藏と全く同樣なので、五體とも同時の作である事がわかる。此の釋迦と地藏の光背の繪は、寶相花の間に菩薩を描いたもので、當代の繪畫として貴重な遺品である。地藏、藥師、十一面觀音も當代の手法を持つてゐる。猶金堂には四天王像があつたのである

が、二天だけ現存してゐる。それは比例（プロポーション）はあまりよくないが、釣合（バランス）はとれてゐる。又釋迦の座像があるが、これは本尊の釋迦立像と同じ形式で、他に唐招提寺地藏堂の地藏も同樣の形式を持つてゐる。灌頂堂は天長年間に創建されたものであるが、其處に安置された如意輪觀音は、建築と同時のものらしく、木彫で、比例よく、表現も穩和な佳作である。

**觀心寺の諸佛像**

觀心寺の本堂は、鎌倉時代の再建であるが、其の本尊如意輪觀音は、高さ三尺の木彫座像で、秘佛であつた爲め完全に保存され、當代の大傑作である。木彫であるが、多少乾漆を以つて補ひ、彩色を施し、蓮座は殊に一々蓮辨に繧繝彩色で寶相花を描き、頗る華麗なものである。面相の表現は、溫和にして艶を含んでゐるが、天平時代の豊艶なのと違つて凄艶とも云ふべきものである。切れの長い眼、やゝ面短かに圓き頰、一手を右頰にあて、幾分かしげた顏は實に何とも云はれない美しさを持つてゐる。而





して六擘の比例も頗る巧に出來てゐる。寶冠、蓮座、光背完備し、當代の代表的傑作であるばかりでなく、各時代を通じても有數の作である。猶金堂に四天王、地藏がある。四天王は姿勢奇拔で、中々勇壯に出來て居り、面相は寧ろ怪異の表現を有し、手法はよく當代の特色を示してゐる。地藏もよい出來で、當代の特色を持つてゐる。次に觀音像が六軀ある中、一體は藤初時代のもので、五體は當代末期のものである。中では十一面觀音が最も傑れ、全體の比例頗るよく、面相の表現は溫和で、衣文の形式、手法は殊に柔らかに出來てゐる。この柔らかさは初期のあるものゝ如く天平風が殘つてゐるのでなくして、次の藤原風の先驅となるべきものである。

**廣隆寺の諸佛像**

廣隆寺は京都市西郊の太秦にある。此寺には飛鳥時代の代表作もあるが、當代のものも多く、又藤原時代のものもある。當代のものとしては、先づ講堂の阿彌陀如來がある。木彫乾漆の座像で高さ八尺、貞

觀十九年の同寺資財校替實錄帖に出て居り、時代の明かなものである。即ち弘仁九年火を失し、承和年間新たに造像したもので、弘仁中期の代表作である。木彫に乾漆を補つてはあるが、當代の特色は手法にも表現にも明かに見えてゐる。彌陀としては當代に珍らしく、次代に澤山作られた彌陀像と比較研究すると面白い。彌陀の脇侍に虛空像と地藏像とがある。手法は本尊よりも一層當代の特色を示してゐるが、作はやゝ劣つてゐる。猶外に地藏堂の地藏像と、四天王とがあるが、何れも佳作である。

**其他の遺物**

一寺に纏つて當代の遺物を有するのは前記三ケ寺の外、東寺、神護寺、金剛峯寺であるが、金剛峯寺は、其の金堂の本尊（秘佛）を始め、其の左右の六體（普賢延命菩薩、不動明王、金剛菩薩、金剛薩埵、虛空藏菩薩、降三世明王）其の他四天王とも、金堂と共に燒失したのは惜しい事である。次に當代の佛教彫刻の遺物の主なものを擧げて置かう。





新藥師寺本堂藥師
東大寺元千手堂千手觀音
神護寺藥師像
同寺五大虛空像
唐招提寺大日如來
同寺地藏堂地藏
法隆寺夢殿觀音
東寺不動明王
同寺講堂諸佛像
興福寺十二神將
金剛峯寺厨子入釋迦三尊（枕本尊）
法隆寺金堂虛空藏

## 同寺聖靈院地藏

右の中、新藥師寺本堂の本尊藥師は、木彫の座像で、前には天平時代と考へられた事もあつたが、木彫であり表現も當代初期の特色を持つてゐる。東大寺の千手觀音も木彫で、高さ八尺、もと千手堂の本尊で、未だ天平時代の特色を有し、兩時代の境界にある遺物である。比例は少し低すぎるが、千手觀音として佳作である。神護寺の藥師像は、等身の木彫で、寺傳弘法大師作、時代相當して居り、衣を透して體格の見えるのが注意すべき點である。同寺の五大虛空像も弘法大師作と傳へられる。高さ二尺五六寸、木彫に乾漆を加へ更らに彩色し、寶冠、胸飾等も附隨してゐる。當代初期の傑作である。唐招提寺大日如來は、高さ一丈二尺の座像で、木彫に乾漆を補つてある。前代の手法と大差ないが、表現は當代の特色を示し、比例も巧に、溫和な面相の中に堂々たる威風を有し、弘仁初期の傑作である。同寺地藏堂の地藏は、寺





傳弘法大師作、衣文に細い線を重ねた所は、室生寺金堂の本尊釋迦と似て居り、又金剛峯寺の枕本尊とも似てゐる。法隆寺夢殿の本尊は救世觀音で飛鳥時代の代表作であるが、其の前に立つてゐるのは、通例前立觀音と稱さ夢殿が貞觀年間改築後安置されたもので、當代末期の作、既に次代の特色が現はれてゐる。東寺の不動明王は、弘法大師一刀三禮の作と傳へられる有名のものである。其の眞僞はわからないが、手法勁健、豪遇雄壯の表現を有する傑作である。同寺の講堂には、不動明王、隆三世明王、大威德明王、軍荼利明王、金剛夜叉、四天王、梵天、帝釋などの像があるが、何れも佳作である。興福寺の十二神將は、薄い板に薄肉彫としたもので甚だ珍らしい。寺傳では弘法大師作と云つてゐるが、とにかく時代は弘仁初期を示してゐる。全體の比例は、横が廣すぎるが、他に類例なき薄肉の木彫として貴重な遺物である。金剛峯寺の厨子入釋迦二尊は、寺傳弘法大師將來と傳へ、普通枕本尊

と稱されてゐる。厨子を開くと、中央に釋迦を刻み、左右に普賢、文珠を刻み、猶三尊の外に多くの佛像が刻まれてゐる。其の樣式は我が天平風とも弘仁風とも異り、健陀羅式の影響が著しい。釋迦の衣文の線を細く重ねた所は室生寺金堂の本尊釋迦よりも一層甚しく、藤初時代に奮然によつて將來せられたと傳ふる清涼寺の釋迦像に似てゐる。

**神像と肖像**

神像は、前に述べた如く、神佛融合說の著しくなつた結果、神社の神體として刻まれる事が行はれたのである。其の遺物として有名なものが三體ある、それは藥師寺の應神天皇像、神功皇后像及び仲津姫像で、何れももと藥師寺の鎭守があつた八幡宮の社殿に安置されてあつたのであるが、明治の初年、神佛分離の際、僧形たる應神天皇像を社殿に置く事が出來ないので、三像とも社殿から出し藥師寺のものとなり、今は奈良博物館に出陳されてゐる。應神天皇は僧形八幡として現はされ、高さ一尺四五寸の





彩色ある木彫座像である。もとより寫生ではなく、一個の理想を現はしたもので、其の面相の表現は溫和であるが、衣文の手法は弘仁時代の特色を示してゐる。神功皇后と仲津姫も應神天皇と同じ大きさの彩色木彫で、矢張理想的に作つたものである。兩像は左手の置き方が少し違つてゐる丈けで、手法表現は全く同樣に、美しい內に凛とした所があり、小像ながら珍らしい佳作である。次に肖像彫刻も前代につゞいて多少行はれたが、其の遺物は前代よりも少い。前代と同じく高僧の像であるが、寫生よりも人格を理想的に現はしたものである。二三の遺物を擧げると、先づ法隆寺觀勒僧正像がある。僧正は推古天皇の時、高麗から來朝した人であるから、全然理想的作品である木彫で面相雄偉に出來てゐるが、衣文の手法はあまり粗大である。同寺夢殿道詮律師像は、貞觀年間に夢殿を修繕した道詮律師で、夢殿を創建した行信律師の像（天平時代の作）と共に安置されてゐる。塑造なのは弘仁時代とし

て珍らしく、面相、衣文とも寫實を加味し、よく出來てゐる。此の外觀心寺聖僧像と法金剛院聖僧像とが注意すべく、殊に前者は傑れてゐるが、後者は後世の修繕によつて原作の妙味を失つてゐる。

## 五　繪　畫

**概觀**

建築と彫刻と工藝美術とは、天平時代に於いて發達の極點に到達したのであるが、繪畫は遺物が少いので不明ではあるが、恐らく他の美術ほど發達せず、弘仁時代に至つて一段の發達をなしたのではないかと思はれる。尤も弘仁時代の繪畫は、彫刻と同じく、密教の關係から、前代とは違つた手法と表現とを持つてゐる。これは佛教畫の事であるが、當代の二大家たる河成と金岡との傳記の中には、非宗教畫を描いた事が中々多い。宗教畫は不相變數に於いて多く、當代は新興の二宗に聯關するもの、即ち胎





藏界金剛界曼荼羅や不動明王などが多く描かれた。

**河成と金岡**

前代までは畫家の名も明かでなかつたが、當代に至つて百濟河成と巨勢金岡の二大家が現はれ、殊に金岡の如きは、我が國最初の畫聖と尊崇されてゐる。河成は百濟人から出で、寶龜十二年に生れ、仁壽三年七十二歳で死んだ。弘仁初期から中期へかけての人で、『文德實錄』によれば大同三年三十七歳で左近衛となり、畫をよく描くので、屢々朝廷へ召され山水草木生けるが如く描いた。又或時自分の從者を呼んで貰ふ爲めに、從者の顏を描いて見せたと傳へられてゐる。これによつて山水畫に長じ、又人物の寫生などにも巧であつた事がわかる。又『今昔物語』には、飛彈匠（ひだのたくみ）と技を競つた事が出てゐる。今日河成の畫と信ずべきものは一つもないが、之等の記事によつて名人であつた事は疑がない。金岡は中納言巨勢野足の裔で、淸和陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へたとあるから、河成の晩年に生れ弘仁

**繪畫**

末期から藤初時代の初期にかけてゐた人である。陽成帝に召されて大學寮に先聖先師の像を描き、又光仁帝及び宇多帝に召されて清涼殿南廂の障子に描き、又紫宸殿の賢聖障子にも描いた。これらの事實によつて、金岡が當時第一流の大家であつた事がわかる。猶清涼殿朝餉の間の障子に描いた馬や仁和寺に描いた馬がぬけだしたといふ傳說で、動物畫にも巧であつた事がわかる又佛畫にも長じてゐた事は、今日金岡筆と稱する佛畫の多いのでわるか。併し其の多くは後世の作で、眞に弘仁時代と考へられるのは甚だ少く、智恩院の不動位のものである。猶山水畫に巧であつた事も、大江匡房の評で明かである。

**僧侶と佛教畫**

僧侶で畫をよくするものが弘仁時代には頗る多かつた。先づ天台眞言二宗の祖たる空海、最澄を初めとし、義眞、圓珍、智泉、實慧、空光等がある。勿論今日ある遺物で、高僧の作と傳へるものは、繪畫ば





かりでなく、彫刻にも多く、弘法大師一刀三禮の作と稱するものは相當にあり、室生寺五重塔の如き建築でさへ、弘法一夜造と稱されてゐる事は既に述べた通りである。これらは必しも眞に僧侶の手に成つたものばかりではなからうが、僧侶が實際刀を執り繪筆を握つた事は確である。何こなれば天台宗にしても眞言宗にしても、其の儀式の對象とする佛像佛畫は、秘密を尙んで他人の手をかりずに、高僧自ら手を下す事があり、而して度々描く內には手法も巧となり、しかも其の人格と精神とは、却つて專門畫家や專門彫刻家の作よりもよく現はれたに違ひない。弘法大師の如きは殊に器用で、佛像佛畫に手を下したと思はれる。今日諸大師作と傳へられる多くのものゝ中には、無論眞僞の明かでないものも多いが、眞作も必ず相當に在り、それは單に高僧と結びつけて、作に勿體をつける手段とばかりは考へられない事が明かである。

**室生寺金堂の繪畫**

室生寺金堂の建築と彫刻については既に述べた、繪畫は佛壇の後壁に描かれた壁畫と釋迦及び地藏の光背の繪である。壁畫は中央に大きく帝釋天を描き、左右に脇侍があり、上方に小さい佛菩薩が多數描かれてゐる、即ち帝釋天曼荼羅で、可なり剝落してゐるが、猶彩色も殘り、構圖や手法も明かに觀取する事が出來る。建築と同時代の製作で、確かな弘仁中期の繪畫として貴重な遺物である。光背は比較的大きな舟形のもので、何れも寶相花の間に釋迦及び地藏を配し、釋迦のは七體、地藏のは九體描かれてゐる。無論彫刻と同時代のもので、彩色が鮮明に殘つてゐるから、標準作として前記壁畫と共に甚だ貴重なものである。佛像の比較は何れも巧に、面相は溫和に描かれ、朱で衣文を描き、其の線の一つ置きに赤黑く隈取をして陰影をつけてゐる。此の手法は當代から次代の初めまでよく用ひられた形式的の陰影法である。これは當代の彫刻の手法と共通の點があり、彫刻を寫生





したやうな感じがある。

**赤不動と黃不動**

當代は密教の關係から彫刻、繪畫とも多くの不動像が作られたが其の中繪畫の二大傑作が遺つてゐる。其の一つは、金剛峯寺明王院のもので、智證大師圓珍の筆と稱されてゐる。六尺に三尺の大作で、不動の面相は悽壯を極め、肌に朱と黑とを交へ、焰は朱を以つて塗り、全體赤色の多く使つてある所から赤不動と稱せられ、不動の畫としては最も古く、又傑作である。他の一つは、園城寺のもので、空光の筆と傳へてゐる。墨で輪廓を描き、更らに朱で描き、肌を黃色に塗つた所から黃不動と稱される。後ろに圓光を描き、其の周圍を火焰が廻つてゐる。赤不動と同樣の傑作である兩不動とも秘佛としてよく保存されてゐる。

**東寺眞言七祖像**

教王護國寺にある眞言七祖像は、七祖の中五祖、即ち金剛智、不空、善無畏、一行、惠果を、弘法大師が入唐した時、惠果阿闍梨

が大師の爲めに、李眞等十一名の畫家に兩界曼荼羅を描かせた際、李眞をして描かしめたもので、他の二祖即ち龍智、龍猛二幅丈け大師が歸朝後、自ら描いたと稱されてゐる。畫に書かれた文字は七幅ともすべて大師の眞筆で、二幅の繪も大師の眞蹟としてまづ確なものとされてゐるが、以後の作とする異說もある。五祖像をみるのに、比較的簡單であるが、筆致は流暢で、雄渾の趣を具へてゐる。二祖像も五祖像を範としたもので、即ち龍猛は善無畏、龍智は金剛智と全く同一の形を持つてゐる。大師筆の眞僞はとにかくとして弘仁時代の人物畫として古來有名なもので、我が國の人物畫としては最古のものである。

**其他の遺物**

以上の外、弘仁時代の繪畫として今日まで遺つてゐるものは餘り多くない。左に主なものを擧げやう。

神護寺胎藏界金剛界兩界曼荼羅





金剛峯寺普門院勸操僧都像

同　寺五大尊像

西大寺十二天像

東寺十二天像

智恩院不動像

法隆寺蓮花屛風

神護寺の兩界曼荼羅は、何れも一丈四方以上の大幅で、弘法大師筆と傳へ兩界曼荼羅として最も古く、後世の粉本となつたものである。幾何學的の圓形の內へ、佛像があてはめられてゐるので、繪畫として構圖はつまらないが細部の手法に見るべき所がある。紫綾の上へ、金泥を以つて佛體、銀泥を以つて衣を描いてゐる。金剛峯寺普門院の勸操僧都像は、これも弘法大師筆と傳へられてゐる。大師は勸操僧都に師事したのであるが、大師の眞筆でなく

同時代の他の畫家の手になつたものである。形式は東寺の七祖像と同様で、方形の牀座に座し、下に水瓶が描かれ、筆致は流暢で、肖像畫として傑作である。同寺の五大尊像は五幅あつて、矢張弘法大師筆と傳へられてゐる。太細のない線で描き、衣文に隈取をして居り、時代は當つてゐる。西大寺の十二天像も、寺傳弘法大師筆となつてゐるが、當代末期のもので、剝落多く、後世の補筆も多い。これに比べると東寺の十二天像は、時代は多少下るが、一層傑れた作である。智恩院の不動像と法隆寺の蓮花屏風ともに金岡作と傳へられてゐる。

## 六　工藝美術

**概觀**

當代の工藝美術は、前の天平時代に大發達を遂げた後を受けて、引續き進歩したであらうが、前代に於ける正倉院の如き纒つた寶





庫がないので、遺物は多く散逸し、現存するものも散在してゐる爲めに振はないやうな觀がある。併し新都の經營と共に建築に附屬する工藝美術の進歩は必ずあつたであらうし、天台眞言二宗勃興に伴つて法具の製作は盛に行はれたに違ひない。又佛像の光背、臺座、寶冠、持物等も工藝美術として主なものである。建築に附屬する工藝品は多く木工で、多少は金工もある。佛具は金工が多く、木工もある。光背、臺座等は、佛像が主として木で作られたので、從つて木工である。猶木工として面などもある。漆工は特に當代から發達し、蒔繪も平塵、末金鏤、平蒔繪等が行はれた。

**遺物**

次に當代工藝美術の主な遺品について述べやう。まづ金工としては、興福寺南圓堂前の銅燈籠がある。前代の東大寺の程大きいものではないが、扉の銘によつて弘仁七年に作られた事がわかる。この銘は橘逸勢の筆と傳へ、製作年代の確かなものである。恰好よく、金燈籠として、

東大寺大佛殿のものについで古いもので、當代唯一の金燈籠である。信濃國上高井郡得科村の清水寺大日堂及び三重塔は、大正五年五月燒失したが、寺寶の兜鍬形は、坂上田村麿が用ひた兜のものであると傳へられてゐる。其の眞僞はわからないが、當代の兜として珍らしい。鐵製であるが、渡金象嵌で雲龍紋を現はしてゐる。其の手法自由であつて、雲龍を巧に狹い鍬形にはめてゐる。室生寺五重塔の相輪については前に述べたが、當代金工の遺品としてみる事が出來る。次に漆工としては、まづ仁和寺の法文冊子筥がある。これは空海が唐から將來した眞言密敎三十帖法文を納れる爲めに作られた筥で蓋の表に其の銘がある。全體黑漆の所へ金銀の蒔繪で、寶相花及び迦陵頻伽を現はしてゐる。迦陵頻伽を主とし、これを圍つて寶相花が全體の空地を塡め、散らし模樣となつてゐる。模樣の意匠としては上乘とは云へないが、時代の確かな點で、貴重な遺品である。同寺の寶珠筥は、宇多天皇の御遺物と





稱し、寶珠を入れた筥である。矢張金銀の蒔繪で、寶相花を一面に現はし、所々に鳳凰が配してある。この方も殆んど散らし模樣で、寶相花は、藤初時代と同じやうな形で、其の製作が當代末期である事を示してゐる。延曆寺の經筥については別に傳へはないが、前の二つの筥と同じ形式のもので、一つの中心を作つて寶相花を圓く配した模樣を蒔繪で現はしてゐる。次に木工としては、觀心寺如意輪觀音の寶冠が透彫で一種の雲紋を現はし、手法鮮やかに、蓮座の蓮瓣には寶相花の繧繝彩色が實に鮮麗に描かれてゐる。又廣隆寺地藏の光背は、大分破損してゐるが、流暢な線の透彫で出來てゐる。最後に瓦も陶工として工藝美術の一種であるが、其の文樣は天平時代と比べて少しも進步してゐないのみならず、或は劣つてゐると云つてもよい。平安內裡の瓦も同樣である。

## 七　弘仁美術の特色と價値

三種の特色

天平時代は、白鳳時代を過渡時代として、一つの完成時代であり爛熟時代であり黄金時代であつた。而して爛熟時代、黄金時代の次に來るのは普通衰微時代である。つまり爛熟時代は頂上に達するので、ついで下り坂となるのである。この常道から云へば、天平時代の次に來た弘仁時代は衰微時代となるべきであるが、事實は然らず、我が美術は天平の黄金時代から一轉して、來るべき新時代に對する一種の過渡時代を現出した。それには種々の理由がある。第一は都が平安から新都平城に遷つた事である。第二は天台、眞言の二宗が勃興した事である。しかも唐との交通はやゝ疎となり、遣唐使の如きも百年間に二回しか行かず、また唐も盛期を過ぎて末世となり、即ち唐の影響は、天平時代を極度として衰へたのである。この唐摸





倣美術としては弘仁時代は衰微したのであるが、別に奠都の爲めに新味を生じ、新興の二宗は、複元的日本佛教で、從來の單元的支那佛教と異り、又前者は密教であり、後者は顯教なので、夫等の變化が美術に影響を與へ、弘仁時代の美術は、天平時代とは大に異る特色を生じた。これを一言で云へば、唐の摸倣は、天平時代で極點に達し、弘仁時代は幾分同化の氣運を生じ、次の同化時代即ち藤初、藤末時代に至る過渡時代となつたのである。前に白鳳時代を過渡時代だと云つたが、それは六朝や隋を摸倣した飛鳥時代から唐摸倣の天平時代に至る過渡時代で、飛鳥、白鳳、天平はつゞいた一大摸倣時代中の過渡期に過ぎないのである。然るに弘仁時代は、此の一大摸倣時代の最後に當り、次の藤初、藤末なる一大同化時代に移る過渡期である。即ち名は同じ過渡時代でも、前後の關係が大に違つてゐる。故に白鳳時代は全然摸倣時代に過ぎないが、弘仁時代には同化時代の萠芽を有してゐる。此の點は最

も注意すべき弘仁美術の特色である。次に新興の二宗が密教であつたので、其の美術も密教美術となり、前代の顯教美術とは全く相反した特色を有する事となつた。これも弘仁美術の特色である。猶其の手法は前代の流暢、圓熟を離れて剛健となり、表現は前代の圓滿、崇高から轉じて幽晦、森嚴となつた。これも弘仁美術の特色である。

**三種の價値**

以上の如き特色を有する弘仁美術の價値は、第一に過渡時代であるから、發達上の價値がある。摸倣から同化に移る過渡時代で、既に同化の分子が含まれてゐる。遺物がないのでよくわからないが、河成や金岡の描いた山水畫や人物畫は、唐畫の摸倣ではなく、寧ろ大和繪の最初のものだつたらうと思ふ。第二に密教美術である爲に、建築(伽籃)は、平地から山地に移つて、諸堂の配置が自由となり、平面や裝飾にも變化を生じた。彫刻は、種類に於いて大日如來や地藏や明王などが多くなり、繪畫も、兩界





曼荼羅や明王などが新しく描かれた、また儀軌が空海によつて將來されたので、佛像の形式、持物が定まつた。これ等の遺物としては、建築には室生寺の堂塔があるばかりであるが、彫刻には觀心寺の如意輪、唐招提寺の大日如來等の傑作があり、繪畫にも赤不動、黃不動、神護寺の兩界曼荼羅などの傑作がある。而して其の多くは密教美術であり、手法は概して勁健で、表現は幽晦、森嚴の風を有し、天平時代と比べては全然別種の趣を持つてゐる。この手法、表現を以つて第三の價値とする事が出來る。最後に殘念なのは、當代に勃興した天台、眞言二宗の本山たる叡山の延曆寺、高野山の金剛峯寺共に當初の建築を有せず、又河成、金岡の二大畫家が其の確かな作品を遺さなかつた事である。

# 第六章 藤初時代

## 一　時代の大勢

**概觀**

藤初時代は、宇多天皇の寛平六年(八九四)から堀河天皇の寛治元年(一〇八七)までの百九十三年間である。寛平六年と云ふのは遣唐使の廢止された年で、即ち唐との公の交通が絶えた時である。既に弘仁時代から唐の影響は薄弱となり、同化の分子が現はれてゐたのであるが、遣唐使廢止後は、益々同化の分子が多くなり、つひに同化時代を現出した。それは鳥羽天皇の建久三年(一一九二)まで續き、これを藤原時代と稱するのは、藤原氏擅權の時代だつたからである。尤も末葉の二十五六年間は、平氏の擅權時代で、特に平氏時代を設ける美術史家もある。又平安京奠都以來を平安朝時代とすれば、弘仁時代は前期で、藤原時代は本期となる事、既に前章の冒頭で述べた通りである。さて藤原時代は實に三百年に垂んとしてゐるので、これ

を前期後期、又は前中後の三期に分つ事も出來るが、私は之れを二つに分け藤初、藤末の二時代とした。其の境界たる寛治元年は、院政の始まつた年であつて、藤原氏の擅權時代は既に終つてゐる。故に一般史では院政後を院政時代と云つてゐるが、美術史としては、藤原時代は大體一貫してゐるので、別の名前を用ひずに藤初、藤末としたのである。

**藤原氏の擅權**

當代に擅權した藤原氏の祖は、鎌足公である。鎌足は天智天皇を助けて國家を中興した功により、藤原姓を賜はつた。鎌足の子不比等も父の功によつて用ひられ、宮子、武智麿(南家)、房前(北家)、宇合(式家)、麻呂(京家)等の子女を生み、宮子は文武天皇の夫人となり、聖武天皇を生み奉つた。茲に藤原氏の榮華を得る基が出來たので、これは天平時代の事である。南北式京の四家には勢力の消長があり、爭もあつたが、房前の孫に內麿が生ずるに至つて、本家として長く榮える事となつた。即ち內麿から冬嗣を經て





良房に至り、太政大臣となり、始めて人臣にして相國に任ぜらるゝ例を開き、文德天皇崩御の後、良房の女の生み奉る淸和天皇御年九歲で即位あらせらるゝや、萬機を攝行し、茲に人臣攝政の例を作り、愈々藤原氏擅權の時代となつた。これ貞觀元年(八五九)で、猶弘仁時代の末期である。淸和天皇は御元服後、親政を執られたが、次の陽成、光孝、宇多の三代は良房の孫、基經が攝政となり、其の女は醍醐天皇に配して朱雀、村上兩帝を生み奉り、以後冷泉圓融、花山、一條、三條、後一條、後朱雀、後冷泉の諸帝すべて藤原氏の出である。而して藤原氏は基經から忠平、師輔、兼家を經て道長の代となり榮華の極點に達した。それは一條天皇の長德二年(九九六)から三條天皇の長和五年(一〇一六)頃までの二十年間で、其の前二十年間と、道長の子賴通の代五十年、即ち前後約百年間が、藤原氏の擅權時代である。後冷泉天皇の次の後三條天皇は、久振で藤原氏の出でないので、記錄所を置き、藤原氏以外の人才

を登用し、在位四年にして位を白河天皇に讓り、太上天皇として萬機を親裁せられんとしたが、御讓位後五ヶ月で崩御せられたので、白河天皇は應德三年位を堀河天皇に讓られ、上皇として政治を執り、玆に所謂院政が始まるのである。藤原氏全盛の時代は、同時に遊樂の時代であつて、歌合、繪合に興じ、詩歌管弦の遊に耽り、從つて風俗は婬靡に流れた。併し京都の貴族上流がかうして遊樂に耽つてゐる間に、將門や純友や忠常の亂があり、又前九年の役もあり、地方には兵亂が起り、其の間に源氏の潛勢力が養はれつゝあつた。藤原時代は實に京都のみを主とした貴族の時代であつたのである。

**佛教の特色**

佛教は前代に天台、眞言の二宗が興り、南都六宗に代つて漸次勢力を高め、朝廷と接近し、貴族の信仰を得て、當代に至り益々盛んとなつた。天台宗に於いては、既に前代に傳教大師の後に、義眞、圓仁、圓珍等の高僧が出たが、當代となつては良源、餘慶、源信、覺運等輩出し、





眞言宗に於いては、前代に弘法大師の後に、實慧、眞雅、益信、聖寶、當代に寛朝、仁海等の高僧が出た。而して之等の高僧は、盛んに加持、祈禱、修法をなした。これは宗祖傳教大師が毘盧遮那法を修し、弘法大師が仁王經法、請雨經法を修した以來の事であるが、當代に至つて益々盛に、天變、地異、降賊、治病等、苟も一寸變つた事があれば修法し、又年中行事的に毎月定つた修法があり、しかもその法會に參する僧の數は百僧から千僧多い時は萬僧に及び、當代の佛教は、一面から云へば、修法の佛教と化した感がある。次に天平時代の南都の佛教が國家的佛教であつたのと違つて、當代の佛教は貴族的佛教であつた。貴族と云つても藤原氏一族の事で、勿論、皇室の信仰歸依もあつたが、それも國家の爲めではなく、御一族の爲めで、藤原氏の出の天皇としては、藤原氏一族と變りはなかつた。即ち皇室としては、所謂六勝寺が何れも其の御願で建てられ、藤原氏は、法勝寺(忠平)、楞嚴院(師輔)、法住

寺(爲光)、法興院(兼家)、法成寺(道長)、淨妙寺(同上)、平等院(賴通)等を建てた。其の中、平等院の凰鳳堂一つを除いて他は悉く亡びたが、其の凰鳳堂だけをみても、又法成寺や法勝寺の供養記をみても、其の規模の大、裝飾の美、供養の盛大であつた事がわかる。

**淨土教の勃興**

淨土教即ち阿彌陀如來にすがつて極樂淨土を願ふ他力教の我が國へ入つたのは古い事である。飛鳥時代に於いて、既に聖德太子は西方淨土を願はれ、橘夫人念持の彌陀三尊もあるし、皇極、孝德の頃慧隱が宮中で無量壽經を講じ、三論の智光が淨土曼荼羅を描いた事も傳へられてゐる。又天平時代には諸國の國分寺に阿彌陀淨土曼荼羅の畫像を作らせ、七日目に稱讃淨土經を寫さしめ、周忌には阿彌陀如來及び脇侍を作らせたとも傳へられてゐる。又弘仁時代に至つては、傳敎大師が四種三昧の中に常行三昧を加へ、圓仁之れを繼承して常行三昧堂を叡山に建立し彌陀像を安置した。





而して藤初時代となつては、初めから其の常行堂で不斷念佛が始められ、初期に生れた空也上人は、天慶元年京に入つて專ら彌陀の佛說を稱へて、市井に勸め、康保二年京を出でゝ奧羽までも念佛を以つて遊化した。併し眞に我が國に淨土敎興隆の基を啓いたのは、天台宗の良源(慈惠僧正)の門から出た源信(惠心僧都)である。僧都は空也上人が入洛して市井に念佛を說いた後四年にして大和葛木郡に生れ、叡山に上つて慈惠僧正について顯密敎を究め、四十四歲の時『往生要集』を著した。これに說く所は、淨土門的の往生、善導派の他力念佛であつて、實に我が國に於ける他力念佛の嚆矢である。僧都は當時憚る所があつて、表面は自力念佛を說き、裏面に眞意たる他力念佛を說いたのであるが、之れを觀破したのは法然上人である。上人は藤末時代の人で他力念佛は上人に大に弘められたが、其の基を啓いたのは惠心僧都で、これが美術に對しても大いなる影響を與へ、所謂淨土敎美術が現はれたのである。

**本地垂跡說**

本地垂跡說、即ち神佛の融合については、屢々述べたが、それは當代に至つて十分に實現された。卽ち神社の境內に神宮寺を設けるばかりでなく、神社に佛舍利を奉り、神社に於いて修法を行ひ、佛經を慶した事が中々多かつた。又佛寺の傍には鎭守社を設け、神社にも神像を安置した事は、『延喜式』に全國の神社に數千の神像を刻んで分つた記事があるので明かである。又神社建築が佛敎建築の影響を受けた事も益々顯著となつた。一寸玆に宗敎の事を終るに當つて、付け加へて置くのは、天台宗に於ける山門、寺門の爭で、慈覺(圓仁)派、智證(圓珍)派とが爭ひ、これは餘慶の時から最も甚しくなり、長く解けなかつた。しかも其の爭は僧侶にして武器を携へ、所謂僧兵と稱し、又嗷訴なる事が起り、延曆寺の僧兵は山王の神輿を、興福寺の僧兵は春日の神木を奉じて入洛し、無理を訴へた。これは藤末時代に至つて甚しく、かくして僧侶は墮落して行つた。





**文學**

漢文學は既に前代の末期に於いて國文學に移つたが、當代は愈々國文學全盛の時代となつた。まづ當代の劈頭に於いて『古今集』の勅選が行はれた。それは紀貫之、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑の四人が勅を奉じて選んだもので、延喜五年に出來、勅選歌集の嚆矢で、選集續出の魁となつた。猶『古今集』には、貫之が國文で序を書いてゐるが、これが國文學に對して歷史的價値あるもので、貫之の他の國文の著『大堰川行幸和歌序』『土佐日記』と共に、國文興隆の先驅となつたものである。次で天曆五年には內裏の昭陽舍(梨壺)に、始めて和歌所を置かれ、藏人少將藤原伊尹を其の別當とし大中臣能宜、淸原元輔、源順、紀時文、坂上望城等を屬せしめ、これを梨壺の五歌仙と云ひ、五歌仙に選ばしめられたのが『後選和歌集』である。これは『古今集』より劣るものであるが、更らに第三に出た勅選歌集『拾遺集』よりは優つてゐる。國文は貫之の後を受けて、『大和物語』、『蜻蛉日記』、『宇津保物語』、

『落窪物語』等が續々出來、ついで中葉以後に至つては、『和泉式部日記』、『枕草紙』、『源氏物語』等が現はれた。和泉式部は、前の業平後の西行と共に平安朝の三大歌人と云ふべく、赤染衞門、藤原實方、能因法師なども歌人として名が高かつた。『枕草紙』は清少納言の隨筆、『源氏物語』は紫式部の小說で、當代の二大作物である許りでなく、我が國文學中の二大傑作である。共に著者が婦人であることも注意すべく、當代の國文學界に婦人の多いのは他の時代に類のない事である。猶末期には『狹衣物語』、『濱松中納言物語』、『更科日記』などが出た。漢文學は前代の末から衰へたが、當代に於いても大江朝綱、菅原文時兼明親王、大江維時、源順、橘直幹等の名家が出た。文學に附隨して、之れに緣ある遊の行はれたのも當代の特色である。第一は歌合で、他に菊子合、撫子合、花合、前栽合、種合、扇合、艶書合など、多くは花について歌の勝負を爭ふ遊で、詩の方でも詩合が行はれた。また之等の文學的遊戲と共に、





管弦の遊も盛んであつた。

## 二　建　築

**概觀**

藤原時代の美術は、飛鳥以來の支那摸倣から漸く離れて、同化の傾向が著しく、日本趣味の横溢したものとなり、佛教關係のものは淨土教の影響を受けたものが多い。建築に於いても、宮殿を始め貴族の邸宅、別莊には日本趣味が發揮され、神社は神佛融合思想の爲めに佛寺の影響を受け、佛寺は皇室及び貴族の御願によつて建立された大伽藍は、壯麗華美で、淨土教の方から建てられた阿彌陀堂は、殊に裝飾が豊麗であつた。神社住宅、佛寺の事は後に詳說するが、宮殿建築は、前代の始め新都經營の際、新築されてから度々火災に罹り、其の都度再建になり、技術は進歩したであらうが、藤初時代百九十年間に十五回も炎上したので、經費の節減もあり、

却つて當初の壯觀を失つたやうである。

**神社建築**

神佛融合思想の爲め、神社建築が佛教建築の影響を受けたのは、天平時代末期からであるが、弘仁時代を經て當代に至り、神佛融合思想の盛なると共に、建築上の神佛融合も一層顯著なるものがあつた。前章に述べた春日造と流造も、既に佛教建築の影響を受けたものであつたが、茲に述べやうとする日吉造は、寧ろ佛教建築を基とし、之れに神社建築の形式を加味したやうなものである。又鳥居を樓門に改め、瑞籬を廻廊に改める事も當代に多く行はれたが、それは全く佛教建築を採用したものである。日吉造は聖帝造とも云ひ、入母屋造向拜附の背面を少し切り去つたやうな形式で、延暦寺の鎭守たる日吉神社に用ひられたので其の名が起り、今日の同社殿は、天正十四年(一五八六)の再建である。神社に入母屋造を用ひたのは、これが嚆矢で、明かに佛教建築の形式から來たものである。平面も五間四面又





は五間三面で、佛寺と同樣である。八幡造は、神明造を前後に二つ並べて向拜をつけたもので、正面からみれば、單に神明造に向拜を附けたものと見える。此の前後に並べるのは、後世權現造などで二殿を前後に並べる源となつた。八幡造の模範は、宇佐の八幡、即ち宇佐神宮であるが、現在の社殿は、文久元年(一八六一)の再建である。前章で述べた春日造と流造とは、當代にも多く用ひられ、殊に流造は、日本趣味に富み、藤原時代の尙好に適した形式である。

**神社建築の遺物**

當代までに現はれた諸形式の神社建築が一つも其實例を遺さないまで、當代唯一の神社建築遺物がある。それは鳳凰堂から程遠からぬ宇治川對岸にある宇治上神社である。此の神社は、醍醐天皇の昌泰年間神托によつて建立を命ぜられ、延喜元年社殿を作つたと傳へられてゐるが、實際を見ると、鳳凰堂前後のものらしく、實に神社建築最古の遺物である。

（拜殿は鎌倉時代）。元來一間社流造（正面の柱間一つの時は一間社といふ、三つの時は三間社といふ）を間隔を置いて三つ並べたもので、左右の社殿が大きく、これに根屋も葺いて中央の社殿は其の下に入つてゐる。であるから外觀は五間三面の切妻造となり、檜皮葺である。向拜一間がつき、其の柱は面とりの角柱で、舟肘木を用ひ、勾欄をつけてある。其の手法が鳳凰堂に似てゐる。本殿の組物は三斗で、左右二殿の正面に立派な本蟇股があり、金色堂、醍醐寺藥師堂のものと共に藤原時代の三蟇股と云はれる。

## 住宅建築

住宅建築は、貴族が勢力を有し、榮華を極めた結果、貴族の邸宅に於いて頗る發達を遂げた。即ち當代貴族の邸宅は、之れを寢殿造と云ひ、藤末時代は勿論、鎌倉、室町時代の末に至る迄、京都の貴族の間に行はれ、桃山時代となつて書院造が之れに代つた。弘仁時代までの貴族の住宅については詳細を知る事が出來ないばかりでなく、特に何造といふやうな名もない位で、恐らく簡單質素のものだつたらうと思ふ。それが藤初時代となり、始めて寢殿造なる名が現はれたので、我が國の住宅建築は、茲に新紀元を生じたものと見る事が出來る。寢殿造は、方形に近い矩形の地面に築地を廻らし、中央に寢殿を置き、北、東、西に對屋（たしのや）を建て、其の間は渡廊でつながれてゐる。斯の如く一つ宛別々の構にするのを一家一構と稱する。寢殿の南は中庭で、庭を隔てゝ池があり、池の中央に島を作り橋を架する。池の南は南庭となり築山を作る。東西對屋から廊を南に出し、東には泉殿、西には釣殿を作る。其の廊の中程に中門を作り、中門から出たところの築地に四脚門を開き出入に便する。寢殿は主人が居り、客に對面する所で、其の平面は多く七間四面（一間の柱間は普通一丈）であるが、時には五間四面、九間四面にする。何れにしても單層、四注で、檜皮葺である。七間四面の場合は、五間二面を身舍とし、其の周圍一間通りを廂とし、其のそとに簀子の椽を廻らしてゐる。

廂の外、南面は蔀戸を立て、側面に妻戸を設け、普通其所から出入する。他の三方は多く櫺子窓で、必要のある所は戸となつてゐる。組物は普通舟肘木で垂木は疎垂木となつてゐる。これは現今の普通の家の樣に垂木の間隔をとるやり方で、社寺のは繁垂木である。その中間に半繁垂木といふのもある。

内部天井は、廂は化粧屋根裏で、身舍には天井を張り、組入天井又は小組格天井とする。床は張るが、疊は敷きつめず、持運びの出來る疊を用ひる。身舍と廂との間は、多くの場合、格子戸で、其の内側に翠簾を垂れ、内部は障子で部屋を仕切り、中央に張臺(寢床)を置き、左右に置疊(座用)を置き、几帳を立てる。すべて素木の儘で別に裝飾もない。對屋は夫人を始め家族の起居する所で、釣殿では釣をなし、泉殿では涼んだり、月見を催す。對屋の屋根は、入母屋、四注、切妻等を混用した。寢殿造は、其の配置、寢殿の平面及び立面、其の檜皮葺である點等から見て、佛教建築とは關係なく、内裡建築から





出た事が明かである。當代貴族の豪奢は、其の邸宅迄も、内裡建築を模倣したのであらう。而して其の表現は、優美、高雅、輕快で、當代の趣味を現はし又日本趣味の横溢したものである。猶寢殿造で注意すべき事は、建築と庭園との結合及び造園術の發達である。かの寢殿の前に庭をとり池を穿ち島を作り橋を架し山を築くが如きは、建築と庭園とを結合したもので、建築が周圍の自然との關係を生じた點を注意すべく、造園術の發達としても觀過すべきでない。最後に寢殿造は、一家一構であるが、當代の中葉、花山天皇の頃から作合せが始まつたと傳へられてゐる。これは曲つた平面や凸字形凹字形の平面を有する家の屋根を續けて葺く事で、書院造には盛んに行はれ、今日も普通行はれるが、其の端を茲に發したのである。

**佛教建築**

佛教建築は、矢張建築の中心をなし、貴族的佛教の産物として、大伽藍が建立せられ、新興の淨土教の爲めに阿彌陀堂が建てられ

たが、再建も相當にある。左に遺物に重きを置いて主なものを擧げる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 醍醐延喜七年 | 九〇七 | 醍醐寺藥師堂(上) | |
| 同　十一年 | (九一一) | 同寺御影堂(上) | |
| 村上天暦五年 | (九五一) | 同寺五重塔(下) | 現存 |
| 圓融永觀元年 | (九八三) | 永觀寺 | |
| 花山寛和元年 | (九八五) | 大原三千院 | 現存 |
| 一條正暦二年 | (九九一) | 法隆寺大講堂(移建) | 現存 |
| 同　年 | (九九一) | 同寺鐘樓 | 現存 |
| 後一條治安二年 | (一〇二二) | 法成寺 | |
| 後冷泉永承二年 | (一〇四七) | 淨瑠璃寺 | 本堂現存 |
| 同　天喜元年 | (一〇五三) | 平等院鳳凰堂 | 現存 |
| 白河承暦元年 | (一〇七七) | 法勝寺 | |





## ?

法界寺　阿彌陀堂現存

前代の遺物が僅に室生寺の五重塔と金堂と二つに過ぎないのに反して、當代は十に近い遺物を有し、しかも其の中には大傑作を含んでゐるが、當代を代表すべき法成、法勝の二寺は全然亡失して俤だにないのは遺憾である。

**法成寺と法勝寺**

法成寺は、藤原氏豪華の絶頂たる道長の建立に係り、金堂、五大堂、三昧堂、大塔、鐘樓、經藏、東西院西北院(僧房)、浴室等から成つてゐた。金堂は大御堂と稱し、柱、組物、梁等は紫檀其の他の銘木を用ひ、これに漆を塗り、卷繪を施し、螺鈿、寶石を鏤め、壁には釋迦八相、飛天其の他を極彩色で描き、堂内には本尊として一代の名工定朝の大日如來像、高さ三丈二尺のものを安置し、左右には高さ二丈の釋迦、藥師、文珠、彌勒の像を安置し、外に高さ九尺の梵天、帝釋、四天王等を安置した、以つて其の規模

の大きい事がわかる。又五大堂には丈六の不動、四大尊、阿彌陀堂には丈六の阿彌陀像九體を安置した。法成寺の位置は、京極の東、荒神口の北に當つてゐる。次に法勝寺は、白河天皇の御願で、金堂、講堂、阿彌陀堂、五大堂、法華堂、八角九重塔其の他が建てられた。金堂は七間四面で、本尊として三丈二尺の毘盧遮那佛を安置し、無量壽如來、天鼓雷音如來の外、九尺の六天像を安置した。講堂も七間四面で、二丈の釋迦像を安置し、阿彌陀堂は十一間四面で、丈六の阿彌陀像九體を安置し、五大堂は五間四面で、二丈六尺の不動像を安置した。又法華堂には七寶多寶塔一基を安置し、八角九重塔は高さ八十四丈と稱される。法勝寺の位置は今の京都市では東部に當つてゐる。猶兩寺落慶供養の盛況は『供養記』に記されてゐるが、今は略する。

**醍醐寺五重塔**

醍醐寺は京都の東南郊外に位置し、理源大師聖寶が貞觀年中創立し、醍醐天皇の延喜九年官寺となり、天曆三年には清涼殿を賜ふ





て法華三昧堂とし、延喜天曆の頃盛に堂塔が建てられた。それは山上と山下に二十六町を距てゝ建てられ、現存の建物は、山下に五重塔(藤初)、金堂(藤末)、三寶院(桃山)、山上に藥師堂(藤末)、清龍堂(室町)、如意輪堂(慶長)、五大堂(同上)、御影堂(同上)等である。之等の配置は云ふまでもなく自由である。五重塔は、山上山下を通じて最古の建築で、山下の松林中に位置し、承平六年藤原忠平が資を投じて中心柱を曳き來り、天曆五年落成し、其の年代の頗る明確なものである。其の後慶長年間豐臣秀頼が大修繕を加へ、內部は多少補つた所もあるが、大體はもとの儘である。石壇の上に立ち、方三間、四方一間づゝ二枚開の戸で他は櫺子窓となつてゐる。內部には柱が四本あり、これを四天柱と稱し、其の間を一段高くし佛壇とし、中央に中心柱がある。中心柱の四面に板を張り、四方に佛像を描いてゐる。組物は三手先、軒は二軒、二重目以上には欄を廻らし、五重の上には青銅の相輪がある。內部初重の天井は組入天井で、極彩色の寶

相花を描いてゐる。猶柱、天井、扉等にも同樣に寶相花を描き、四方の壁には、上方に佛像、下方に眞言八祖像が描かれてゐるが、比較的よく保存せられ當代初葉の繪畫として貴重な遺物である。此の塔は塔身の高さに比して幅が廣いので安定の感を與へ、又相輪の長さが全長の三割四分、即ち約三分の一に當るので、一層安定の感じを與へる。而して塔本來の意味から重要な相輪に對して、塔身は臺に役立つてゐる。藤初時代の初期を代表する建築で、五重塔としては、法隆寺のものに亞ぐ傑作である。

**平等院鳳凰堂**

平等院は、もと源融の別莊地で、宇治川に臨み、當時から有名な景色のいゝ所で、陽成、宇多、朱雀三帝も行幸せられた。後藤原道長の手に歸し、次で賴通の領となり、賴通は永承七年、之れを寺とし、堂塔を造營し、平等院と名づけた。當時建てられた堂塔は、阿彌陀堂、即ち鳳凰堂、經堂、金堂、三重塔、講堂、鐘樓、東法華堂、西法華堂、五大堂等で





あつたが、現存するものは、鳳凰堂の外、釣殿（鎌倉時代）、鐘樓（室町時代）があるのみである。鳳凰堂の位置は、東に宇治川を隔てゝ朝日山に對し、西南には小丘があり、景色はよいが、地勢上南面して建てる事が出來ないので、賴通は大江匡房の言により他に例ある事を知り、堂を東に向け、大門を北に建て、他の諸堂も自由に配置した。鳳凰堂は、平面、立面とも、全く他に類のない頗る珍しい建築である。即ち先づ平面から云ふと、本殿は方三間で、周圍に一間の裳層を有し、本殿の左右に翼廊の出づる事五間、更らに前方に曲折して二間あり、本殿の後方には尾廊が七間延びてゐる。此の形が鳥の羽翼を張り尾をのばしてゐる樣なので、鳳凰堂と名づけたとも云ひ、又本殿屋上に銅製の鳳凰を載せたので左樣云ふとも傳へられる。立面は、本殿は重層、入母屋造で、裳層の屋根は正面の中央を破つて一段高くし、翼廊及び尾廊は、單層、切妻造で、翼廊の曲折する角の所は、重層で寶形造となつてゐる。本殿は一

段高い石段上に建てられ、柱は太い圓柱で、組物は三手先を用ひ、裳層の柱は大きく面をとつた角柱で、組物は三斗である。裳層の方は一般に木割が細く、柱の外、虹梁、桁、梁、組物の斗や肘木など皆面がとつてある。翼廊は平地の上に建てられ、やゝ細い圓柱を用ひ、組物は出組である。本殿の四方は、壁若しくは扉で圍まれてゐるが、翼廊は柱のみで、吹ぬきとなつてゐる。すべて屋根は本瓦葺で、本殿の大棟に銅鳳がのつてゐる。本殿の內部に入ると、床は低く板張で、中央一間を佛壇とし、其の上に丈六の彌陀座像を安置してある。天井は折上組入天井で、小壁には五十二菩薩を雲中供養のさまに懸け列ねてゐる、外部は、柱、壁とも丹塗とし、垂木、尾垂木の鼻には透彫唐草模樣の金具を附し、扉には寶相花の毛彫ある八双金具を附してある。此の扉には菩薩、天人、山水等を彩色で描き、柱にも寶相花及び菩薩を、長押、貫、組物等にも寶相花を、天井の格緣、格間には寶相花を一つ一つ何れも彩



色で描き、四方の壁には、淨土曼荼羅、九品淨土を彩色で描いてゐる。又本尊の上には大なる天蓋を下げ、下には大なる佛壇があり、兩者とも透彫、螺鈿其の他を以つて裝飾されてゐる。以上鳳凰堂の建築及び裝飾について大要を說明したのであるが、詳細に涉つては到底玆に述べられないので、其特色と價値とについて一言して置く。第一には、其の位置が優れ、建築と自然とをよく結合してゐる事である。大體よい位置である上に、堂前に池を穿ち、其の水は後方尾廊の下まで引かれてゐる。第二には、平面が變化多く、しかもよく纏まつてゐることである。本殿の左右に翼廊を出し、其れを前方に屈曲させ、後方に尾廊を出した意匠は、全く獨特のもので、恐らく寢殿造などからヒントを得たのであらうが、實に驚嘆すべき卓拔な意匠である。第三には、立面の變化もこれに伴ひ、變化多くしてしかも統一されてゐる事である。屋根だけみても本殿は大きな入母屋で全體を統一し、翼廊は切妻とし、左右

角の樓には實形を用ひ、日本建築の主な屋根を三種用ひ、且つ本殿裳層の屋根の中央を破つて一段高くし、翼廊の兩端は切妻の妻を見せてゐる。かく十分な變化を作りながら、各部の比例は最も巧妙に、大體としては嚴格な對稱を守り、整然として一絲亂れず、かの美學上の形式原理たる「多樣の統一」は、鳳凰堂によつて具體化されてゐるのである。第四には、細部に於いて一層巧妙な變化を求めてゐる事である。例へば柱は本殿を圓柱とし、裳層を角柱とした如き、組物は本殿に三手先、裳層に三斗、翼樓に出組を用ひた如き著しい例である。最後に第五に、裝飾として各種の手法を用ひ、裝嚴、華麗を極めた事である。猶彫刻としては本尊及び五十二佛、繪畫としては扉繪、壁畫があり、工藝美術としては、天蓋、連座、佛壇等があり、當代美術界最大の遺物であるばかりでなく、日本美術史上に於ける一大傑作で、世界美術史上に於いても相當の價値があり、同時代に出來たピザの堂塔に比べて、材料、樣





式は全然違ふが、決して遜色はないと思ふ。

**法界寺阿彌陀堂**

法界寺は、京都市東南の近郊に在る。弘仁年間、日野大納言家宗が創立し、荒廢してゐたのを永承六年(一〇五一)日野三位資業が諸堂を再興し、現存の阿彌陀堂は當時のものと傳へてゐる。果して然らば鳳凰堂竣工の二年前に當る。外の建築には藥師堂がもと奈良縣龍田町に在つた胎金堂(室町時代)を近年移建したのがあるのみである。阿彌陀堂の建築年代については、色々記錄もあるが、永承六年よりは大分遲れるらしく、藤初時代の末葉位と考へられる。實物の上からも鳳凰堂よりは遲れてゐる。方五間で、裳層を有し、屋根は實形造の檜皮葺である。裳層の屋根の前面中央を破つて一段高くしてあるのは、鳳凰堂にもあつたやり方である。四方に廻椽を廻らし、正面及び左右の三方に階段を附してある。本殿の柱は比較的太い圓柱で、裳層の柱はやゝ細き角柱で、面をとつてあるが、この手法の變化も、鳳凰堂と

全く同様である。組物は本殿、裳層とも三斗である。内部は床を張り、四本の柱を立て、其の内を内陣とし、佛壇を置き、丈六の彌陀座像を安置してある。天井は外陣を化粧屋根裏とし、内陣は折上組入天井となつてゐる。裝飾としては内外木材の部分を丹塗とし、内部は至る所彩色を施してある。先づ柱は布で包み、その上へ漆を塗り、之れに佛菩薩の像を描き、菩薩の間には唐草模様を描き、天井、組物等には寶相花を描いてある。又小壁には天人及び樂器の空中に飛んでゐる様を漆喰の上に描き、繪畫として立派のものである。此の建築は、阿彌陀堂建築の模範とすべきもので、簡單ではあるが、全體の恰好が頗るよく、屋根の勾配の緩くして檜皮葺を用ひた點、組物に三手先を用ひないで三斗を用ひた點など、總べて優雅、輕快の表現を有し、藤初時代に發展した日本趣味をよく發揮した建築として大なる價値があり、しかも内部の裝飾、壁畫、彫刻等も立派な作なので、一層價値がある。鳳凰堂と





比べては劣るけれども、亦日本美術史上、重要な遺物である。

**其他の遺物**

次に他の遺物について簡單に述べて置く。大原の三千院(極樂院)は、寛和元年、花山天皇の勅願によつて惠心僧都が建立し、僧都の母安養尼が住んだ遺跡と傳へてゐる。三間四面(梁間三間、桁行四間)、單層、入母屋造(妻入)、柿葺で、後世一間の向拜を附した。周圍に廻椽を廻らし、勾欄を附し、正面に階段がある。内部は床を張り、四本の柱があり、其の内を内陣とし、後の二本の柱間を壁とし、其の前に勾欄ある佛壇を置き、彌陀三尊を安置してゐる。天井は中央を舟底形としてあるが、それは小さな堂に丈六の像を安置する爲めであらう。天井には二十五菩薩を描き、彌陀三尊の後壁には、兩界曼荼羅、四方の壁には、無數の小佛、柱、長押、垂木間等には彩色で寶相花を描いてある。此の堂は、所謂阿彌陀堂建築の小さなもので、平面のほゞ方形な點、内部に柱を立てゝ内外陣の境界を開放した點、彩色で

二十五菩薩や寶相花を描いて裝飾とした點など、其の特色で、又木割が細くなり、柱に角柱を用ひた事なども阿彌陀堂建築に共通である。後世の補修の多い點は遺憾であるが、當代に勃興した阿彌陀堂建築最古の遺物として注意すべきものである。法隆寺の大講堂は、延長三年火災に罹つた後六十六年を經て、正暦二年、法隆寺別當觀理僧都が山城深草の普明寺の堂舍を移建したものである。其の際再び火災に罹り、金堂や五重塔に災する事を惧れ、もとの位置よりも後方にさげ、北室のあつた所へ即ち今の位置に建てた。此の時移建されたので、其の以前のものであるが、果して何年前のものかわからず移建の際大修補を加へ、猶慶長元和の頃にも大修繕を加へられた。九間四面單層、入母屋造、本瓦葺の建築で、石壇上に立つてゐる。組物は三斗、軒は二軒、内部の床は石敷、天井は組入天井である。全體の比例よく、木割雄大で、平面立面とも天平時代の形式を有し、細部には藤初時代初期の特色があ





る。同寺鐘樓は、恐らく大講堂移建の際の新築に成つたもので、三間二面、重層、切妻造、本瓦葺の小建築である。淨瑠璃寺は、京都府ではあるが、奈良に近く、木津驛の南方約一里の所に在る。寺傳天平十五年の創立、本堂は天元年間再興せられ、永承二年、僧義明によつて再建されたものである。別に鎌倉時代の三重塔がある。十一間四面、單層、四注、本瓦葺の建築で、廻椽を廻してゐる。内部は床を張り、天井は化粧屋根裏で、中央は特に一段高くしてある。十一間四面といふ非常に長い平面は、九體の彌陀を安置する爲めで、法成寺や法勝寺にもあつた。猶中央の天井を一段高くしてあるのは、其處に丈六の彌陀を安置する爲めである。簡單な建築ではあるが、九體の彌陀を安置する爲め、普通の阿彌陀堂とは全然異なる平面を有し、其の唯一の例として注意すべく、前面に池を穿ち、自然との結合も企てられてゐる。九體の彌陀も當代の彫刻である。

## 三　彫刻

**概觀**

當代の彫刻は、建築と同じく同化の傾向が著しく、日本趣味のものが現はれたが、種類は不相變佛教彫刻が主で、それは天台、眞言二宗のものも刻まれたが、それよりも當代に勃興した淨土教のものが多く、即ち阿彌陀如來を本尊とし、觀音、勢至を脇侍とする阿彌陀三尊が最も著しい題目である。又吉祥天女の如きものも當代得意の題材であつた。其の材料は前代に引續き木が多く用ひられたが、之れに金箔を貼し、又は彩色を施し、壯嚴にして優美の表現を生じた。而して其の手法は、前代の如く刀法を明かに示さず、圓味を帶び、爲めに優美の表現を强めた。又寶冠、胸飾、光背、台座等も優美、華麗となり、一層佛像をして優美ならしめ、藤末時代に至つては、纖巧に流れ過ぎるものを生じた位である。





**主なる彫刻家**

當代に至つて特に注意すべき事は、專門彫刻家の名が漸く現はれた事である。前代にも弘法大師始め僧侶で彫刻をしたと傳へられたものがあつたが、當代に至つては、僧侶として會理僧都と惠心僧都が有名であつた外、專門の彫刻家として、康尙、定朝、覺助、長勢等が出た。康尙は當代中期の人で、長保四年に禁裡御八講の本尊白檀の佛體を刻み、寬弘二年には一條天皇等身の金色藥師と十一面觀音とを作つた。かく朝廷の御用をする位であるから無論當時の大家だつたに違ひない。子定朝は一世の大家で道長の奬勵によつて十分其の天才を發揮し、治安二年に法成寺の佛像を彫み、其の功によつて法橋となつたが、僧侶以外に此の名譽を得たのは定朝を以つて嚆矢とする。長曆四年には後朱雀天皇の御持佛を刻み、永承年間道長が興福寺を再興した時には其の佛像を刻み、鳳凰堂の建築に際しては其の本尊を作つた。この鳳凰堂本尊は現に同堂に存し、彼れの大傑作と稱されてゐる。

猶淨瑠璃寺本堂の九體彌陀、四天王、法界寺阿彌陀堂の本尊なども定朝作と傳へられ、我が彫刻史上の大家の一人である事を實際に證明してゐる。又定朝は始めて七條佛所を開き、子覺助、弟子長勢が出た。覺助は法成寺の無量壽院及び五大堂の佛像を刻み、平等院や興福寺の像も作り、法眼となり、長勢は法成寺、圓宗寺、法勝寺、廣隆寺等の佛像を刻み、法印となつた。而して覺助は七條佛所を嗣ぎ、長勢は別に三條佛所を開いた。定朝、覺助、長勢は藤初時代の三大彫刻家であるが、定朝が特に傑れてゐる事は云ふ迄もない。

**醍醐寺の諸佛像**

醍醐寺は前述の如く、延喜七年理源大師の創立に係り、藥師堂は藤末時代(保安五年)の再建であるが、本尊藥師及脇侍は、當初のもので理源大師の作と傳へ、ほゞ確かなものである。本尊は高さ六尺餘の座像で、大なる蓮座の上に在つて、比例よく、面相の表現頗る勇偉で、藤初時代の特色たる優美と反し、衣文の如きも力强い手法によつてゐる。蓋し前代の





遺風を有し、高僧の英邁な精神を表現したものであらう。當代初期の傑作である。猶藥師堂には、炎魔天、吉祥天、帝釋天の三像がある。何れも寺傳理源大師の作、當代初期の特色を持つてゐる。

**法隆寺の諸佛像**

法隆寺には、其の創建された飛鳥時代のものを始め、各時代に渉つて遺物があるが、藤初時代のものは比較的多い。即ち大講堂の藥師三尊及び四天王、新堂の藥師三尊及び四天王、金堂の毘沙門天及び吉祥天、夢殿の阿彌陀如來(二體)の外、肖像として繪殿安置の聖德太子七歲像がある。大講堂は正曆二年の移建に係る事を前に述べたが、堂內の藥師三尊及び四天王は、其の時新しく作られたもので、すべて光背、臺座に至るまで完全に殘つてゐる。本尊は比例よく整ひ、面相溫和、衣文流暢、藤原時代の特色を供へ、光背の透彫の唐草模樣及び臺座の浮彫も當代の特色を現はしてゐる、殊に四天王は彩色の裝飾を有し、其の文樣は種々で、よく保存され、當代の

文様を見るべき遺物である。新堂は南大門から中門に至る途の西側にある鎌倉時代の建築であるが、其の藥師三尊と四天王は、藤初時代の中期を下らないものである。本尊は座像で比例よく、面相は温和にして優美、衣が臺座に垂れ下つてゐるのは當代としては珍らしい。臺座も同時のものであるが、當代の臺座としては簡單である。脇侍は立像で、少し腰をひねつた姿勢が面白く、面相は本尊と同樣豐頰で、優美である。四天王も同時のもので、當代の特色を持つてゐる。金堂には飛鳥時代の大彫刻が多いので、毘沙門天と吉祥天とは目立たないが、承暦二年作の記錄があり、當代末期の標準作とする事が出來る。共に彩色裝飾を有し、吉祥天は頗る優美で、淨瑠璃寺のものよりも其の度を増してゐる。毘沙門天はやゝ見劣がするが、それは當代の手法が吉祥天の方に適してゐるためであらう。繪殿の聖德太子像については後に述べる。





**鳳凰堂の諸佛**

鳳凰堂の建築は、天喜元年に落成したものであるが、其の本尊彌陀も亦同時に定朝によつて作られた。高い臺座の上に載せられた丈六の座像で、其の姿勢と云ひ、比例と云ひ申分のない出來で、特に面相の表現は優美を極め、衣文流暢にして、手法圓熟の域に達してゐる。又光背、臺座もよく保存せられ、光背は一種の唐草を透彫とし、臺座には寶相花を浮彫にしてある。本像は當代第一の大家定朝の傑作で、阿彌陀像彫刻の模範となり、藤初時代の特色を發揮した代表作である。次に小壁にある五十二佛は、雲中供養の有樣に懸け列ねてある。これも本尊同樣定朝の作と傳へてゐる。其の確證はないが、同時のものである事は確かである。姿勢には種々あつて何れも優美に出來てゐる。

**淨瑠璃寺の諸佛**

淨瑠璃寺本堂の事は建築の項で述べたが、其の內部には本尊を中央にして、左右に四體づゝ總計九體の彌陀を並べてゐる。本尊は

丈六の座像で、他の八體はやゝ小さい。本尊は比例、面相の表現、衣文の手法等、鳳凰堂の本尊とよく似た傑作で、寺傳定朝と云ふのは確かであらう。蓮座も同時の作で、光背は後世の拙作である。他の八體は優美に於いて本尊に優つてゐるが、雄大の風なく、本尊よりは少しく劣つてゐる。定朝指揮の下に弟子等が作つたものかもしれない。とにかく九體の彌陀が並んだ所は偉觀で、當代の有名な寺には幾つもあつたのであるが、何れも記錄のみで、現存してゐるのは本堂ばかりで、しかも本尊は定朝の傑作であるから當代の彫刻として最も貴重な遺物の一つである。本尊のわきにある四天王も定朝作と傳へられ、確證はないが、時代は當つて居る。比例よく、姿勢も整ひ、面相も温和である。鎧には彩色模様が鮮明に殘つてゐるが、其の種類多く、法隆寺大講堂の四天王のと共に、藤初時代の彩色模様を研究すべき好材料である、同寺の吉祥天は、今東京の帝室博物館に陳列されてゐる。もと厨子に入つて





居り、其の厨子は東京美術學校に藏されてゐる。本像の年代は始め天平時代と考へられたが、多分當代中葉以後のものであらう。寶冠、胸飾、蓮座等完備し、全部彩色を施し、頗る優美なもので前代の觀心寺の如意輪と比べると、ずつと優しく艶がある。蓋し當代の趣味を發揮した傑作の一つである。

**其他の遺物**

以上、當代の遺物を多く藏する寺の佛像について述べたが、猶他に主なものが多少あるのを次に列擧する。

觀心寺聖觀音像
道明寺十一面觀音像　二軀
法界寺阿彌陀堂本尊阿彌陀如來
峰定寺吉祥天
廣隆寺十二神將
極樂院本尊藥師像

萬壽寺阿彌陀如來像
圓成寺本尊阿彌陀如來像
當麻寺講堂本尊阿彌陀如來像
北圓堂本尊彌勒像

右の內、觀心寺聖觀音は、等身の木彫で、溫和の表現を有し、比例もよく、當代初期の特色を持つてゐる。道明寺の十一面觀音は二軀あるが、一つは菅公作と稱するもので、時代は當つてゐる。姿勢面相の表現等極めて優れた作である。他の一軀は簡單なものである。法界寺阿彌陀堂は、前に述べた如く藤初時代末葉の建築で、本尊の阿彌陀如來は、丈六の座像で、比例頗るよく、面相は最も優美で、手法殊に流暢を極めてゐる。光背は飛天を模樣化した飛天光で、定朝が好んで作つたと傳へられ、當代唯一の遺物である。本像は定朝作と傳へられてゐるが、鳳凰堂本尊や淨瑠璃寺本尊に比べると、表現、手





法とも多少異り、兩像より時代が遲れてゐるのは建築と聯關してゐる事でもあるが、淨瑠璃寺の八體と同じ調子を持つてゐる所から、定朝の弟子の作か、或は定朝晩年の作かもしれない。何れにしても古來鳳凰堂、淨瑠璃寺のものと共に、定朝の三傑作と稱せられ、當代の代表的遺物である。峰定寺の吉祥天は、淨瑠璃寺のに比べて、寧ろ淸楚とも云ふべき作であるが、面相は優美を極めてゐる。淨瑠璃寺のもの及び法隆寺金堂のものと比較研究の好材料である。廣隆寺の十二神將は、定朝の弟子たる長勢の作と傳へられ、年代は相當してゐる。手法圓熟し、藤初時代末期の特色を供へてゐる。萬壽寺、圓成寺、當麻寺講堂等の阿彌陀如來は、何れも當代の特色を持つてゐる。猶一つ附加へて置きたいのは、一條天皇の永延元年(宋の大宗雍熙四年)、僧奝然によつて將來された淸凉寺の釋迦像の事である。これは當時の我が國の佛像とは全然違つた樣式のもので、衣が兩肩を被ひ、衣の襞は數多く重り合つてゐる。

この様式の系統については種々説もあるが、印度から支那に入つたもので、衣の襞が無數に重つてゐる所は形式派のものである事を示してゐる。而してこの様式は、あまり我が國へ影響を與へず、極めて小數の遺物を存するのみである。

**神像と肖像**

神像は前代からぽつぽつ神社に安置せられたが、當代となつて延喜年間に數千の神像を刻んで全國の神社に分配された事が「延喜式」に見えてゐるから、多數の神像の出來た事は明かである。尤もそれは比較的簡單のもので、佛像の如く精巧のものはないが、幼稚のところに趣がある。次に肖像は、法隆寺東院繪殿安置の聖德太子七歳像が有名である。胎内に銘があつて、佛師僧圓快、繪師秦致眞が作り、治暦五年の作で、もと聖靈會の本尊であつた。猶同寺聖靈院にも聖德太子像があるが、それは藤末時代のものである。





## 四　繪畫

**概觀**

當代の繪畫は、建築、彫刻と同じく同化の傾向が著しく、日本趣味のものが現はれた。種類も佛教畫の外、山水畫、人物畫、風俗畫、歴史畫等の非宗教畫が現はれた。而して佛教畫には淨土教に關するものが多いが、その中にも彌陀來迎圖の如きは、多くは自然の背景を有し、それは同化の現れと見る事が出來る。非宗教畫の發達は、寢殿造の發達に伴ひ、其の室内裝飾として用ひられ、又國文學の勃興につれて起つたものと考へられる。又自然と接觸する當代の趣味の上から、山水畫が行はれ、佛畫にさへ自然を結合したものが現はれた。次に系統的に專門畫家の輩出した事も彫刻と同樣であるが、それは項を改めて述べやう。

**主なる畫家**

專門畫家の外に、僧侶で畫をよくする者のあつた事は彫刻と同樣である。惠心僧都は最も有名で、其の傑作は高野山の二十五菩薩來迎圖である。これは僧都の傑作であるばかりでなく、當代の代表作で、我が國佛畫の最大傑作の一つである。僧都は他力念佛を說いた最初の人で、今日ある來迎彌陀の圖は、大抵僧都の筆と傳へられるが、前記高野山のものゝ外は何れも確證なく、多くは年代も下るものである。會理僧都は彫刻にも長じてゐたが、佛畫にも巧だつたと傳へられてゐる。次に專門畫家として、前代の大家巨勢金岡の子に、相見、公忠、公茂の三人がある。何れも相當の大家であつた。公忠の子に公茂(公望ともかく)がある、從來の寫生風を一變して理想化した事が『古今著聞集』に出てゐる。公茂の曾孫(孫とも云ふ)に廣高(弘高とも書く)がある。道長時代に腕を振ひ、其の巧であつた事は『今昔物語』に出てゐる。この一家は所謂巨勢派をなすもので、公忠以下皆繪所長者に任ぜら





れ、世襲的に畫家を職業とした。巨勢派の廣高と時代を同じくし、之れと肩を並べたのは托摩爲成である。『今昔物語』によれば、宇治殿の別莊の繪を描いたといふ事で、從來鳳凰堂の扉繪も爲成の筆と傳へられてゐるが、これは疑問である。又爲成を托摩派の祖とする說もあるが明かでない、併し爲成が大家であつた事は確である。藤原基光は白河天皇の時、從五位內匠頭となり、繪所長者に任ぜられ、土佐派の祖となつた人である。藤初時代から藤末時代へかけての大家であつた。僧侶で畫に巧な珍海は其の子であつて、藤原隆能も其の子とする說(土佐派の系圖)もあるが確ではない。

**壁畫の遺物**

次に當代繪畫の遺物を述べるが、先づ壁畫に立派のものが三つある。それは醍醐寺五重塔と、鳳凰堂と、法界寺阿彌陀堂とである。醍醐寺五重塔は、前述の通り天曆五年に出來たもので、內部の壁畫は、繪畫としては大したものでもないが、建築と同時で、年代の確かな標準作として

貴重なものである。その繪は二種で、一つは中心柱を四方から板で圍つて、四方に胎藏界曼荼羅の一部を描き、他の一つは四方の羽目板に、上方に十體づゝの佛像、下に眞言八祖像を描いてある。描線は細くして流暢で、黃や赤の彩色を用ひ、體には赤の隈取があるが、弘仁時代に比べると餘程優雅になつてゐる。鳳凰堂も建築の項で述べた通り永承七年に建てられ、壁畫も同時のものであるから、年代が確であり、しかも繪畫としても優秀の作で、托摩爲成の筆と傳へられてゐるが、それは猶研究の餘地がある。扉と壁と兩方にあるので、扉の方には菩薩、天人、山水等を描き、四方の壁には淨土曼荼羅、九品淨土等が描かれてゐる。本尊の面部、其の他肌を金泥で描き、他は朱、綠青等の色彩を用ひ、衣文には細い線を重ねてゐる。さうして佛菩薩の面相優美に、衣文等は纖麗である。又扉の方の背景に山や樹木が描かれてゐるが、山は綠青で塗り、樹木の幹や枝は墨で描き、葉には綠青が用ひてある。之等





の手法は土佐繪の源泉をなしたものと考へる事が出來る。法界寺阿彌陀堂は、建築の年代が不明なので、從つて壁畫の時代も不明であるが、建築と同じく恐らく當代末期のものであらう。本尊の上の小壁に、天人、樂器などの飛んでゐる樣を描いてあるが、それは漆喰の上へ直ちに繪具で描いたもので、鳳凰堂のが漆喰の上へ胡粉を塗つてから描いたものと違つてゐる。比較的よく保存され、天人の飛んでゐる姿が頗る巧に、衣の靡いてゐる樣もよく現はれてゐる。天人の畫としては、法隆寺金堂の天蓋にあるものについで貴重な遺物で、後世天人の繪の模範となるものである。猶大原三千院の天井に二十五菩薩が描かれ、彌陀三尊の後壁に兩界曼荼羅が描かれてゐる。恐らく建築と同時(寬和元年)のもので、當代初期に屬するが、剝落が甚しい。

高野山聖衆來迎圖

淨土敎の發達と共に彌陀來迎圖が多く描かれたが、其の代表的傑作は、もと叡山にあり今高野山の所有に歸し、高野山靈寶館の紫

雲殿に特別陳列されるもので、惠心僧都の作として最も信ずべく、今は三幅となつてゐるが、もとは一幅で、可なりの大作である。中央に大きく彌陀の座像を描き、それをとりまゐて觀音、勢至を始め、諸菩薩が雲中に描かれ、左の下の方には岩石と樹木とが現はされてゐる。構圖雄大にして、本尊其の他の姿勢も各々比例よく、面相は圓滿優美の内に森嚴の氣宇を有し、彩色豐麗、本尊の衣文には截金(きりかね)を用ひ、益々華麗さを發揮してゐる。截金とは細微の金線を貼する事で、正倉院御物にも發見されるが、主に當代から行はれ、殊に繪畫に應用する事は當代からで、藤原、鎌倉時代には盛んに佛畫に用ひられ華麗の効果を助けてゐる。此の來迎圖は實に當代の大傑作であるばかりでなく、我が國佛畫中の代表的傑作である。

**其他の遺物**

次に當代繪畫の遺物の主なものを列記し、簡單に說明して置かうと思ふ。





東寺觀知院閻魔天像
法華寺彌陀三尊及童子像
長法寺金棺出現圖
原氏孔雀明王
東京帝室博物館普賢菩薩
益田氏十一面觀音
高野山涅槃圖
東京美術學校厨子扉繪

東寺觀知院の閻魔天は、會理僧都の作と傳へられるもので、時代は當つてゐる。まだ弘仁時代の特色も殘つてゐるが、藤初時代の優美の兆を帶びてゐる。法華寺の彌陀三尊及童子像は三幅で、一幅に本尊、一幅に觀音勢至、一幅に童子が描かれてゐる。本尊は雄大で、觀音勢至が自由に面白く出來てゐ

る。この二幅と童子の幅とは筆者も異り、時代も童子の方がやゝ下つてゐるらしい。長法寺金棺出現圖は、釋迦が再生して金棺から出現し、說法する樣を現はしたもの。構圖奇拔で、彩色も美しく、截金を用ひてゐる。原富太郎氏藏の孔雀明王は、色彩豊富で截金を用ひ、優美纖麗を極め、しかも構圖端嚴で氣品頗る高く、當代の特色を發揮した傑作である。東京帝室博物館の普賢菩薩は、前記の孔雀明王にも優る優美纖麗のもので、第一に白象に乘つた構圖から孔雀明王のやうに端嚴でなく、よく藤初時代中期以後の特色を現はしてゐる。益田孝男の十一面觀音は、もと大和法起寺にあつたもので、彩色豊麗を極め、截金を用ひてゐる。面相の表現やゝ强く、顏や手足に朱の隈取があつて、すべて調子が古く、恐らく藤初時代初期のものであらう。高野山涅槃圖は、應德三年四月十七日奉寫已畢と書いてあるので年代が確である。色彩豊富で、佛菩薩の面相は優美を極めてゐる。藤初時代末期の代表作である。





る。東京美術學校藏の厨子は、前に淨瑠璃寺にあつたものである。彫刻の所で述べた吉祥天女像の厨子で、その扉に梵天、帝釋、四天王を極彩色で描いてある。比較的古い調子はあるが、それは古いものを寫したからであらう。始めは天平時代のものと考へられたこともあるが、彫刻と共に當代のものである。

## 五　工藝美術

**概觀**

當代の工藝美術は、建築と彫刻の發達に伴ひ大いに進步した。殊に佛敎に關するものは、佛寺が朝廷や貴族によつて建てられた淨土敎のものが多いので、豊麗な裝飾を必要とする所から大いに發展したのである。非宗敎的のものも、寢殿造の大成と共に、其の裝飾、調度として發達した。技巧の種類としては、金工、木工、漆工、螺鈿、象眼、染織工等すべ

て進歩し、殊に織工は、宇多、醍醐兩朝の奬勵、貴族の服裝の爲め發達した。當代の婦人の禮裝としては、五衣や十二單衣が行はれ、色彩の配合には最も苦心し、四季によつて色を變へ、花との關係を考へ、自然の愛を服飾に結び付け、日本趣味を發揮した。

**鳳凰堂の遺物**

平等院鳳凰堂は、既に述べた如く、建築、彫刻、繪畫とも當代の代表的遺物を持つてゐるが、其の裝飾、器物等は立派な工藝美術である。先づ屋上の銅鳳は翼をたて尾をあげた姿勢がよく、扉の八双金物は形がよく寶相花の毛彫を施し、共に金工として優秀なものである。次に佛壇は黑色の漆を塗つた上に螺鈿を施したものであるが、螺鈿は痕ばかりで少しも殘つてゐない。本尊の天蓋は大體木造で、內部を折上組入天井とし、褐色の漆を塗り、寶相花を螺鈿で現はし、軒は唐草模樣の透彫で、更らに透彫の垂れを下げてゐる。これらの透彫の圖案は頗る流暢な線を用ひ、手法巧に、





木工としては頗る傑れたものである。本尊の光背は所謂飛天光で、飛んだ天人を圖案化して透彫としたものである。臺座も蓮瓣の下に更らに幾重にも蓮花、蓮瓣を彫刻した臺を重ね、それに彫刻を施し、臺座として立派のものである。

**其他の遺物**

鳳凰堂內にある譯ではないが、平等院の鐘は、例の「音は三井寺、銘は神護寺、形は平等院」といふ日本三名鐘の一つで、形は其の點で三名鐘に入る丈け頗る比例よく、外部の模樣の唐草、天人、獅子等もよく出來てゐる。佛像の光背と臺座は木工としてみるべきものであるが、飛天光の遺物としては、法界寺阿彌陀堂本尊のもの、法隆寺大講堂藥師三尊のもの、など傑れてゐる。臺座は前に述べた形式のもので、鳳凰堂本尊の外、法隆寺大講堂藥師三尊、法界寺阿彌陀堂本尊、淨瑠璃寺本堂本尊、法隆寺夢殿の彌陀等がある。金剛峯寺の經唐櫃は、脚のついた唐櫃で、澤に菖蒲の花が咲き、

これに鳥を配した意匠で、蓋は別の模様となつてゐる。何れも蒔繪に螺鈿をなし、澤の有様が寫生風に優美に出來てゐる。當代の特色をよく現はした代表的遺物である。法界寺阿彌陀堂の卷柱については、前にも述べたが、漆塗の上に唐草模様と菩薩の像を描いてゐる。織工品としては仁和寺に三條天皇の第四王子性信法親王の横被に寶珠文及び七寶文の倭錦がある。何れも色の種類が多く、配合も巧に出來てゐる。瓦には巴瓦に巴の形の最も初期のものが現はれ、劍巴の唐草瓦もある、猶當代の工藝美術品の遺物は澤山あると思ふが今は略して置く。

## 六　藤初美術の特色と價値

**四種の特色**

我が國の美術は、天平時代で一つの完成時代、黄金時代を作つたが、それは要するに模倣時代であつて、次の弘仁時代を過渡時代





として、茲に同化時代たる藤原時代を現出した。即ち藤原時代の主な特色は、同化時代といふ所にある。天平時代に於いて全然唐化したものを漸次日本化し、日本趣味を著しく發揮するやうになつたのが藤初時代である。例へば建築に於いて住宅は勿論、佛寺でさへも自然と結合して其の調和を計つたが如き、屋根の勾配を極めて緩にし、檜皮葺を用ひて優美、輕快の表現を持つたが如き、繪畫に山水畫、風俗畫が行はれ、佛畫にすら自然を取り入れたものあるが如き、何れも其の證をする事が出來る。第二の特色は、貴族的藝術である事であるが、それは當代の佛教が、貴族的佛教である所から來る當然の特色である。第三の特色は、淨土教藝術である事で、これも當代の佛教界に淨土教が勃興した事から當然の結果である。第四に表現上の特色を擧げると、同化、即ち日本趣味の發揮、貴族的、淨土教的といふ所から、優美、輕快、華麗などの特色が擧げられる。これは前代の特色たる幽晦、森嚴から全

く反對の方向に轉じたのである。

**同化時代の價値**

以上の如き特色を有する藤初美術の價値は、第一に同化時代であるから、從來の模倣を脱し、日本固有の國民性に立歸り、日本趣味を發揮した點にある。藝術に最も尊いのは、云ふ迄もなく獨創であるが、同化は一旦模倣したものを更らに最初の獨創的分子を含む根幹によつて感化するので、換言すれば獨創的分子を含んで居る。具體的に云へば、之れによつて日本固有の國民性が發揮せられ、日本趣味が發現せらるゝのであるから、其の點に大なる價値があり、模倣時代とは全然別種の價値がある譯である。この價値は根本的のもので、最も重要な點である。この意味で鳳凰堂の建築の如きは、最も價値がある。次に貴族藝術である爲めに、豪華の表現を有するものがあるが、これも一つの價値であると思ふ。第三に淨土教藝術であるから、すべて明るく、優美に、華麗になつた點に價値がある。此の第二、第





三の價値は、實際に殘つて居ないが、記錄上から、法成、法勝二寺の裝飾の如きは、よく之れを代表したものであつたらうと思はれる。現存のものでは鳳凰堂の裝飾や高野山の二十五菩薩來迎圖の如きは、これを代表してゐる。最後に單に遺物として見ても、建築に於ける鳳凰堂、法界寺阿彌陀堂、彫刻に於ける鳳凰堂の本尊、法界寺阿彌陀堂の本尊、繪畫に於ける高野山の二十五菩薩來迎圖の如きは、何れも我が國美術史を通じての代表的傑作である。即ちこれらの傑作を有するだけでも藤初時代美術の價値は頗る大いなりと云はねばならぬ。

# 第七章　藤末時代

## 一　時代の大勢

**概觀**

藤末時代は、堀河天皇の寛治元年(一〇八七)院政が始まつてから、鳥羽天皇の建久三年(一一九二)源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの百五年間である。それが藤原時代の後半に當り、最後の二十五六年間が平氏時代であつた事は、前章の冒頭に述べた。藤原時代は院政時代と平氏時代とに分つ事が出來るが、藤初時代から引續き同化時代である。藤原氏の擅權が衰へて、院政時代となりつゞいて平氏時代となつたのであるから、藤末時代と云ふ名は當らないやうであるが、美術の特色から云ふと全く同樣であり、又此の時代に當つて、奥羽平泉の地に藤原清衡が居城を構へ、子基衡、孫秀衡と三代七八十年間に渉つて榮華を極め、美術上にも相當の功績を遺してゐるので、この點から藤末時代の名は適してゐると思ふ。

**源氏と平氏**

前九年の役のあつたのは、藤初時代の末葉であるが、其の際武功を建てたのは、源頼義であつた。當代となり劈頭、後三年の役が起り、これに武功を顯はしたのは、頼義の子義家で、源氏の武力は漸く現はれ、其の潜勢力は關東に根ざした。併し院政の終頃となつて平氏の勢力が高まり、保元平治の亂に於いては、源氏は全く平氏に壓され、清盛は仁安二年(一一六七)太政大臣となり、曩日の藤原氏の如く擅權を極め、豪奢を縱にしたが、永續せず、再び源氏に壓され、文治元年(一一八五)平氏は壇の浦に亡び源頼朝、征夷大將軍に任ぜられ、次で鎌倉に幕府を開くに至り、鎌倉時代が始まつた。斯くの如く藤末時代には、奥羽に西國に兵亂があり、中央には延暦寺や興福寺の嗷訴があり、可なり騒がしい時勢であつた。

**陸奥藤原氏の豪奢**

後三年の役に義家を救けた藤原清衡は、嘉保元年(一〇九五)平泉に移り、居城を構へ、遠く京都を摸し、十二年を經て、長治二年(一





一〇五)中尊寺を草創し、子基衡は毛越寺を建て、孫秀衡は無量光院を建立した。秀衡の死んだのは文治三年(一一八七)であるから、清衡が平泉に移つてから九十年間となる。この陸奥藤原氏と其の建立した寺院については、後に詳說するが、京都を遠く離れた奥羽の地に一つの美術の中心を作つた事は、別に平氏が、西に嚴島神社を再建し、此處にも美術の一小中心をなした事と共に、これ迄の美術が、奈良、京都附近を離れなかつたのに對して注意すべき現象である。

**佛教**

佛教は前代の繼續であつて、矢張天台、眞言の二宗が盛んで、それは一面に於いて加持、祈禱、修法の宗教であり、一面に於いて貴族的宗教であり、又他方に於いて僧兵を蓄へ、嗷訴を行ふ宗教であつた。尤も貴族的宗教と云つても、藤原氏全盛の時は既に過ぎ去り、陸奥藤原氏と末期に平氏が榮えた外は、直接皇室に庇護せらるゝ事が多く、所謂六勝寺は

何れも皇室の御願で建立された。即ち白河(法勝寺、尊勝寺)、鳥羽(最勝寺)、待賢門院(圓勝寺)、崇德(成勝寺)、近衞(延勝寺)の六寺で、中法勝寺だけは前代の末期に屬する。これらは前代に藤原氏が道長始め寺院を建立したのと同樣で、必しも國家鎭護の爲めでなく、御一族の冥福を祈らるゝ爲めであつた。此の點は政敎一致の天平時代に、聖武天皇が東大寺を國家鎭護の爲め建立されたのとは意味が違つてゐる。天台、眞言の二宗が加持、祈禱、修法の宗敎となり、又僧兵どもが嗷訴を事としてゐる間に、淨土敎は旣に前代に惠心僧都によつて他力念佛の眞意が說かれ、其の末期から當代の始めにかけては、良忍上人が融通念佛宗を弘めた。これは他力敎を自力敎の眼で解釋したのに過ぎないが、次に現はれた法然上人は、惠心僧都の說いた善導派の他力念佛を弘め、其の門弟に高僧が輩出して、次の鎌倉時代には益々弘まり、別に親鸞上人も現はれて淨土宗を開き、爾來今日に至るまで他力念佛の信仰は全國





に浸潤してゐる。又當代は神佛の融合も益々行はれ、神社と佛寺との關係が密接になつて來た。

**文學**

文學も藤初時代の繼續であるが、其の末葉に於いて小說が全盛であつた反動として、歌壇が再び隆盛となつた。即ち歌人として、藤原通俊、源經信、子俊賴、藤原基俊、同顯輔、子淸輔、西行法師等が出た。就中西行法師は、前の業平、和泉式部と共に平安朝に於ける三大歌人の一人である。當代に出た歌集としては、『後拾遺集』、『金葉集』、『詞花集』、『千載集』がある。小說には大した作も現はれなかつたが、散文の一種として、國文の歷史の大作『榮華物語』、『大鏡』が前後して著された。漢文にも藤原明衡、同敦基、同敦光、大江匡房、三善爲兼、入道信西、藤原賴業等の大家が輩出したが、之等の人も詩文を作るよりも選集に力を用ひ、『東朝文粹』、『續東朝文粹』、『朝野群載』等多くの詩文集が出來た。猶當代の國文には、其の內容に佛

教的思想が多くなつたが、それは神佛融合が文學に影響を與へたものと考へる事が出來やう。序に述べるが、一般の風俗は益々華美柔弱に流れた。鳥羽天皇の頃から强裝束の用ひられた事は其の證據である。これは都の京都ばかりでなく、陸奥藤原氏なども京都を摸し、末葉の平氏も同樣であつた。但し地方には武士が潛勢力を養ふと共に、剛健の風も兆して居つたのである。

## 二　建　築

**概觀**

藤末時代の建築は、全然藤初時代の繼續である。宮殿建築は、前代の頻々たる炎上の後を受け、當代はそれ程炎上はなかつたが、大して造營されたとも覺えない。之れに反して皇室御願の大伽藍の建立多く、佛教建築は大に發達した、所謂六勝寺がそれである。神社建築と住宅建築は、ともに前代の繼續で、別に新しい形式も現はれなかつた。





**嚴島神社**

神社建築には新しい形式は現はれなかつたが、當代に其の規模を大成した嚴島神社について先づ述べて置く。嚴島神社の創立は、社傳によれば推古天皇時代で、弘仁時代の記錄にも出てゐるから、可なり古い神社である事は確であるが、當代末期に、平清盛が安藝守となり、大に社殿を擴張して再建する迄は、餘り世に知られなかつた。清盛の再建は仁安二年に落成したが、京都に來て勢を得てからも篤く之れを尊崇した。其の後本社殿は貞應二年火災に罹り、安貞元年再建に着手し、仁治二年落成した。然るに毛利元就は、社殿を汚したと云つて、弘治二年再び本社殿を改築した。即ち現在の本社殿で、客神社は仁治二年のものである　斯く屢々再建されたが、其の位置と平面とは、仁安二年清盛が經營した儘であつて、樣式手法も亦當時のものを學んでゐる。即ちこれをこの藤末時代の條下に述べる所以である。此の神社で先づ注意すべきは、云ふ迄もなく其の位置であつて、建築

と自然とを、最もよく調和する位置を選んだ事である。一般に藤原時代は建築と自然の關係が密接であるが、これ程密接の度を強め、大膽に設計されたものは他にない。即ち背景を山とし、前景に海を控へ、左右に延びた陸を持ち、社殿は全く自然のふところに抱かれ、建物は全く自然の一風物と成つてゐる。次に面白いのは、其の全體の平面である。先づ本社と客神社との二部に分かたれ、本社は正面にあつて、本殿の前に幣殿があり、其の前に拜殿、秡殿と一直線上に立つてゐる。客神社は左の方に、本社に向つて殆んど直角に建ち、本殿、幣殿、拜殿、秡殿と一直線上に立つてゐる。猶朝座屋、大國神社、天神社、能舞臺、平舞臺、門客神社、樂房などが附屬し、夫れ等がすべて廻廊でつながれてゐる。即ち本社も客神社も、各々對稱（シムメトリー）を守つてゐるが、全體としては不對稱的な、自由な、しかも複雜な平面なのである。第三に立面も亦複雜を極めてゐる。本社の本殿の屋根は前後に流れた流造であるが、





拜殿は入母屋造となり、秡殿は入母屋造の妻を正面として、軒の中央を一段高くし、廻廊は總べて切妻である。それらが前述の通り曲折した平面に伴うてあるのであるから、全體としては極めて變化に富み、繪畫的意匠の上乘なものである。しかも其の屋根は、勾配の甚だ緩い檜皮葺で、表現は優美輕快を極め、藤末時代の特色をよく示してゐる。加之、細部も組物、蟇股に至るまでよく藤末時代の手法を持つてゐる。而して此の複雜な平面は、佛寺に於ける鳳凰堂と共に、藤原時代に盛に行はれた寢殿造の影響から出來たものと考へられる。即ち內裡建築から寢殿造が出で、更らに佛寺に影響しては鳳凰堂となり、神社に影響しては嚴島神社となつたのであらう。要するに嚴島神社は、現在の建築は、鎌倉時代及び室町時代のものであるが、自然と結合した位置と云ひ、複雜なる平面と云ひ、優美輕快なる立面と云ひ、すべて藤末時代の特色をよく現はし、單に同時代のみならず日本の神社建築として、將

又日本建築全體を通じて最も傑れたものゝ一つである。猶建築としての說明は、鎌倉時代及び室町時代の條下で試みるつもりである。

**神社建築遺物**

次に當代の神社建築の遺物は四つある。先づ第一は奈良の春日神社南門と廻廊である。春日神社は神護景雲年間の草創であるが、社殿は文久二年の再建で、南門と廻廊に關しては、『春日神社社頭由來』によつて治承三年(一一七九)のものである事がわかる。此の時從來の鳥居と瑞籬とをやめて南門と廻廊に改められたので、それは佛寺の影響である。南門は三間一戸の樓門で、下層の屋根なく、勾欄を廻らしてゐる。組物は腰組は三手先、上層は二手先、屋根は入母屋根で檜皮葺である。全體の恰好もよく、丹塗が靑葉と映じて美しい。廻廊は複廊で、組物は三斗、屋根は檜皮葺であるが、改築の部分が多い。次に春日神社の若宮は、長承年間に創建されたもので、其の前の神樂殿も同時の建築であるとの說があるが、治承年間建立との說も





あり、構造樣式からは治承年間、卽ち藤末時代のものらしい。神樂殿と云つても床の高い普通の神樂殿とは全く異り、床は殊に低く、すべての點が神社建築よりも住宅建築に近く、當代の住宅建築の參考ともなるべき貴重な遺物である。桁行十間、梁間三間、單層、切妻流造、檜皮葺の建築で、組物は舟肘木、軒は二軒、疎垂木である。疎垂木は繁垂木と違つて、垂木を疎(まばら)に置き今日の普通の家と同樣である。これが爲めに非常に輕快な表現を呈する。又一體に木割が細く、組物は最も簡單であるし、屋根は勾配頗るゆるく、且つ流れて居り、檜皮葺なので、其の表現は、優美、輕快、瀟洒を極めてゐる。最後に三佛寺は伯耆國三德山頂にある。寺傳によれば、慶雲三年役行者が開き、後嘉祥二年慈覺大師が山下に伽籃を建て、それが遺つてゐると稱してゐるが、現在ある投入堂と納經堂とは藤末時代のものである。その納經堂は一間社春日造で、小さいが春日造としては最古の遺物である。

**佛教建築**

佛教建築は、依然として建築界の中心で、皇室御願の大伽藍を始め、多くの寺院が建てられた。今遺物に重きを置いて、主なものを列擧すると、次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 堀河唐和四年（一一〇二） | 尊勝寺 | | |
| 鳥羽天仁二年（一一〇九 | 中尊寺 | 經藏 | 現存 |
| 同　？ | 最勝寺 | | |
| 同　保安五年（一一二四） | 醍醐寺藥師堂 | | 現存 |
| 崇德天治元年（一一二四） | 中尊寺金色堂 | | 現存 |
| 同　？ | 成勝寺 | | |
| 近衞仁平年間 | 豐樂寺藥師堂 | | 現存 |
| 同 | 延勝寺 | | |
| 二條永承元年（一一六〇） | 白水阿彌陀堂 | | 現存 |





| | | |
|---|---|---|
| 高倉治承二年（一一七八） | 高藏寺藥師堂 | 現存 |
| ？ | 石山寺本堂 | 現存 |
| ？ | 三佛寺投入堂 | 現存 |
| ？ | 富貴寺本堂 | 現存 |
| ？ | 鶴林寺太子堂及常行堂 | 現存 |

**中尊寺毛越寺其他**

中尊寺は陸中一の關の北平泉に在る。寺傳は仁明天皇の嘉祥三年慈覺大師の開基に係り、始め弘臺壽院と稱し、淸和天皇の貞觀元年中尊寺の號を賜はつた事になつてゐるが、長治二年堀河天皇が勅を藤原淸衡に下されて創建になつたのが、『吾妻鏡』や中尊寺古文書によると正しく思はれる。而して堂宇の建築は、天仁元年から始まり、三間四面檜皮葺金堂、二階塔婆三基、二階瓦葺經藏一宇、二階鐘樓一宇、大門三宇等を主とし、金色堂、帝釋堂、辨才天堂、千手院等、『吾妻鏡』に所謂寺塔四十餘宇、禪坊三百